

高鍋町文化財調査報告書 第5集

大戸ノ口第2遺跡

OHTONOKUCHI

1991. 3

宮崎県 児湯郡
高鍋町教育委員会

高鍋町文化財調査報告書 第5集

大戸ノ口第2遺跡
OHTONOKUCHI

1991. 3

高鍋町教育委員会

序

高鍋町は高鍋藩の城下町であり、藩校「明倫堂」の伝統を今に受け継ぐ「歴史と文教の町」としてよく知られているところであります。

土持氏から伊東氏、そして秋月氏の居城であった高鍋城跡は良好に保存され、町のシンボルとして町民に大変親しまれています。

また、日向灘に注ぐ小丸川の両岸には国指定史跡持田古墳群をはじめ数多くの遺跡が所在する地でもあり、悠久な歴史と伝統の息づく町であります。

このたび、町では役場の西側台地に総合体育施設を建設することになりましたが、体育館建設予定地には縄文時代、弥生時代、古墳時代の大戸ノ口第2遺跡が所在していることから事前に発掘調査を行い、記録保存の措置をとることになりました。

本書は町教育委員会が実施した大戸ノ口第2遺跡発掘調査の報告書であります。

学術研究資料としてのみならず郷土を理解するための資料として社会教育や学校教育において広く活用されることを期待しますとともに調査に際して種々ご協力いただいた方々にたいし厚くお礼申し上げます。

平成3年3月

高鍋町教育委員会
教育長 岩永高徳

例　　言

1. 本書は高鍋町教育委員会が平成元年度に実施した大戸ノ口第2遺跡の発掘調査報告書である。調査区内A～F区のうち、E区（取付け道路部分）については、別途報告する予定である。

2. 調査関係者は次のとおりである。

調査主体 高鍋町教育委員会

教　育　長 岩永 高徳

社会教育課長 加藤 秀雄

” 課長補佐 江川 雅章（文化財担当）

調　　査　員 戸高真知子（社会教育課臨時職員）

岩永 哲夫（宮崎県教育庁文化課）

3. 本書の執筆は縄文土器について岩永哲夫が、他はすべて戸高真知子が当たり、編集は岩永・戸高がおこなった。

4. 出土品等の資料は高鍋町教育委員会において保管している。

5. 出土品等を整理する過程において広島大学文学部講師河瀬正利氏に種々御教示いただいた。

6. 石器石材同定については宍戸 章氏（宮崎県教育庁文化課主査・日本地質学会会員）に、出土貝類の貝種同定については西 邦雄氏（宮崎県立大宮高等学校教諭）にそれぞれお願いした。

7. 本書では、集石造構にS I、土塙にS C、住居址および堅穴状造構にS A、溝状造構にS E、土塙墓にS D、性格不明の造構にS Zの略号を用いている。

8. 発掘調査および整理作業においては下記の方々の協力を得た。

発掘調査 松下健一、岩村キミ、永田テルミ、田中 豊、藤田イワ子、黒木恵美子、
矢野益子、矢野アイ子、松下ミエ、中村佐栄子、津江敏子、柄森美陽子、
橋 稚子、太田郁子、間野ゆき子、筒井芳子、黒木昭子、宇治橋洋子、
元木温子、寺崎優美子、吉田ムツ子、河野節子、内田のり子、荒川美紀子、
荒川修子、江島久代、中野ゆか、松木美恵子、新城悦子、大久保和江、
清水初美、泥谷スミ子、井上峰子、大西ミチ子、杉尾美千子、高山清美、
岩切和佳子、山崎マサコ、橋本フチ子、高山サトエ、森 きく、木下久美子、
安藤美知子、富永幸子、鳥枝 誠（別府大学）、富元佳子・安倍聰子・
松村みどり（以上鹿児島大学法文学部考古学研究室）

整理作業 重永美恵子、富永優子、山口マサ子

9. 遺構実測図の方位は磁北、レベルは海拔絶対高である。また、ドットは遺物出土位置
を示したものである。

目 次

I はじめに	
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 遺跡の立地と環境	3
第3節 遺跡確認調査	4
II 調査の概要	
第1節 発掘調査の経過	5
第2節 屢序	6
III 調査の結果	
第1節 縄文時代の遺構と遺物	15
1. 遺構	15
2. 遺物	16
(1) 土器	16
(2) 石器	27
第2節 弥生時代の遺構と遺物	31
1. 土塹	31
2. 住居址	39
3. 遺構外出土の遺物	61
第3節 古墳時代の遺構と遺物	62
1. 住居址及び土塹	62
2. 遺構外出土の遺物	65
(1) 須恵器	65
(2) 土師器	65
第4節 平安時代の遺構と遺物	66
第5節 時期不明の遺構と遺物	67
1. 溝状遺構	67
2. 土塹	67

3. 配石遺構	68
4. 性格不明の遺構	70
5. 遺構外出土の遺物	70
 IVまとめ	 72

挿 図 目 次

第1図 遺跡位置図	1
第2図 遺跡周辺地形図	2
第3図 段丘地帯模式図および分布図	3
第4図 基本土層模式図	7
第5図 土層観察図	8
第6図 遺跡確認調査トレンチおよび調査区配置周辺地形図	9
第7図 遺構分布状況図	11
第8図 集石遺構および遺物検出状況図（アカホヤ下）	13
第9図 S I 2・25実測図	15
第10図 S C 6実測図	16
第11図 確認調査時出土縄文土器実測図	19
第12図 縄文土器53出土状況図	19
第13図 縄文土器実測図（1）	20
第14図 縄文土器実測図（2）	21
第15図 縄文土器実測図（3）	22
第16図 縄文土器実測図（4）	23
第17図 縄文土器実測図（5）	24
第18図 縄文土器実測図（6）	25
第19図 異形石鏃実測図	26
第20図 石鏃分類図	27
第21図 石器実測図（1）	28
第22図 石器実測図（2）	29

第23図 石器実測図（3）	30
第24図 S C12実測図	32
第25図 S C13遺構・山上石斧実測図	32
第26図 S C14実測図	33
第27図 S C12遺物実測図	34
第28図 S C12・13・14遺物実測図	35
第29図 S C15遺構・遺物実測図	36
第30図 S A 1 遺構・遺物実測図	39
第31図 S A 2 実測図	41
第32図 S A 2・3 遺物実測図	42
第33図 S A 3・4 遺構実測図	43
第34図 S A 4 遺物実測図	44
第35図 S A 6 遺構・遺物実測図	46
第36図 S A 7・8 実測図	47
第37図 S A 9 遺構・遺物実測図	48
第38図 S A10遺構実測図	49
第39図 S A10遺物実測図	50
第40図 S A11実測図	52
第41図 S A12推定範囲およびS C 1・10・11位置図	53
第42図 S C 1・10遺構・遺物およびS A12遺物実測図	54
第43図 S C11遺構・遺物実測図	55
第44図 S A13・S C19・S A13出土砥石実測図	56
第45図 S A13遺物実測図（1）	57
第46図 S A13遺物実測図（2）	58
第47図 S A13遺物実測図（3）	59
第48図 S A13遺物実測図（4）	60
第49図 遺構外出土弥生土器実測図	61
第50図 S A 5 遺構・遺物実測図	62
第51図 S C 9 遺構・遺物実測図	63
第52図 表土出土須恵器実測図	64

第53図	表土出土土師器実測図	65
第54図	S D 1 遺構・遺物実測図	66
第55図	S C 3 • 4 • 5 • 7 • 8 実測図	69
第56図	時期不明遺物実測図	70
第57図	配石遺構およびS Z 1 実測図	71

表 目 次

表1	弥生時代の上塙一覧表	31
表2	弥生時代の住居址および竪穴状遺構一覧表	38
表3	時期不明上塙一覧表	68
表4	S C 3 出土貝類一覧表	69

図 版 目 次

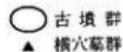
図版1	遺跡全景（南東より） E区住居址検出状況
図版2	遺跡遠景（東側市街地より） 縄文時代早期の礫群検出状況
図版3	C区礫群検出状況（北西より） 礫群検出状況
図版4	S I 1 • 22 • 39 • 40、F区礫集積状況
図版5	S I 8 石斧出土状況、縄文土器53出土状況 S C 6 遺物出土状況
図版6	S C 12 • S C 14 遺物出土状況、S A 2 検出状況
図版7	S A 1 • 4、S E 2、S A 6 検出状況
図版8	B区遺構検出状況 S A 8 • 9 • 10 • 11
図版9	S A 12 推定範囲西部、S C 1 • 10 • 11 S A 13 遺物検出（中途）・土器出土状況
図版10	S D 1 遺物出土状況、S C 3 • 9 • 19

配石造構検出・配石検出状況

- 図版11 繩文土器 1
- 図版12 繩文土器 2
- 図版13 繩文土器 3
- 図版14 繩文土器 4
- 図版15 繩文土器 5
- 図版16 繩文時代の石器、弥生土器、須恵器、土師器、鉄刀
- 図版17 繩文・弥生時代の石器、弥生土器
- 図版18 弥生土器



- 1 大戸ノ口第1遺跡(弥生～中世、散布地)
- 2 大戸ノ口第2遺跡
- 3 大戸ノ口第3遺跡(弥生～古墳、包蔵地)
- 4 妻道南遺跡 (先土器～中世)
- 5 水谷原第2遺跡 (縄文早期)
- 6 耳蔵遺跡 (縄文散布地、手向山式土器出土)
- 7 持田中尾遺跡 (先土器、弥生前期)
- 8 上ノ別府遺跡 (古墳後期、住居群)
- 9 持田古墳群
- 10 高鍋(財部)城址 (中世山城～近世)



I はじめに

第1節 調査に至る経緯

大戸ノ口第2遺跡は、宮崎県児湯郡高鍋町大字上江字大戸ノ口に所在する。

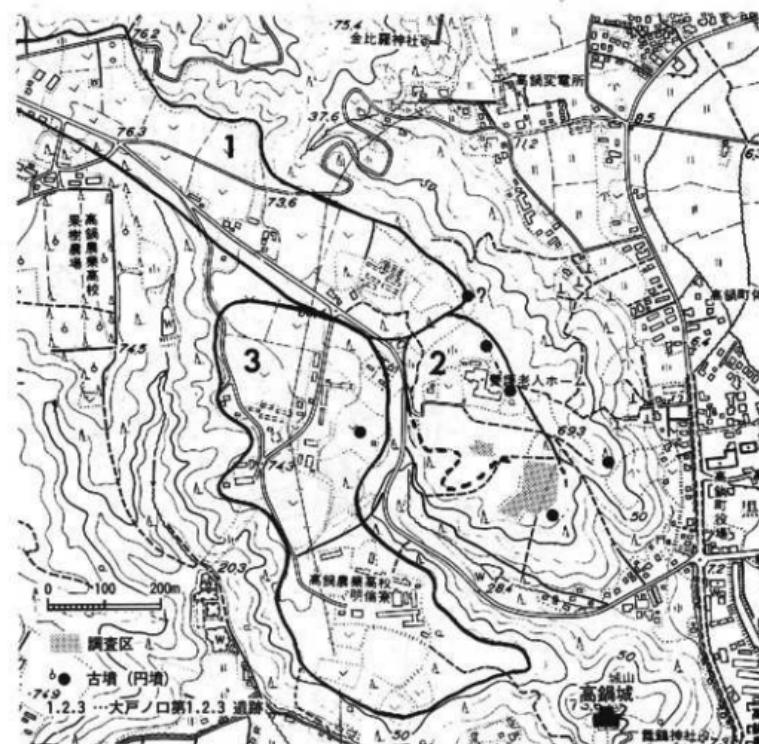
大戸ノ口地区は、昭和63年に実施された町内遺跡詳細分布調査で3つの遺跡（大戸ノ口第1～3遺跡）が確認された「周知の埋蔵文化財包蔵地」であったが、そのうちの第2遺跡内的一部に高鍋町が総合体育施設建設を計画したことから、造成工事に先立つ埋蔵文化



第1図 遺跡位置図 (1:50,000)

財の調査が必至となつた。そこで、高鍋町教育委員会は、遺跡の規模・内容を把握するため遺跡確認調査を県教育庁文化課に依頼し、同課主任主事永友良典が昭和63年12月15日から20日までの6日間調査に当たつた（詳細は第3節参照）。

調査の結果、建設用地東部の舌状丘陵上に縄文時代早期の遺跡が確認されたことから高鍋町教育委員会は、本調査を平成1年8月2日から11月末日までの予定で実施することとなつた。



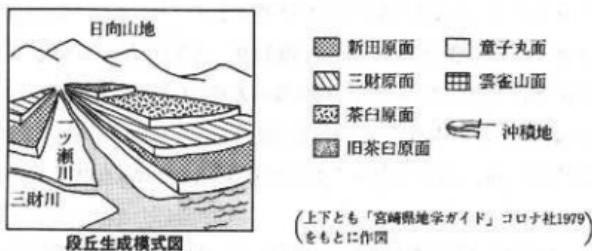
第2図 遺跡周辺地形図 (1:10,000)

第2節 遺跡の立地と環境

高鍋町は、日向灘に面した宮崎県沿岸部の中央に位置している。町の北西から河口へ南東方向に流れ出る小丸川は、遠く日向山地に源を発し、最下流に現在町の市街地となっている沖積平野を形成している。また、町の西半及び南部と小丸川を隔てた北部には標高50～70mの洪積台地が拡がり、沖積地を取り囲む形となっている（第1図）。

大戸ノ口第2遺跡は、町内中西部の牛牧台地東端の丘陵上に立地しており、東には日向灘と眼下に市街地を、南には雲雀山から西へ続く台地を望む好地である。

この遺跡の地理的及び歴史的な環境の特色は、次の二語に集約されるだろう。それは、「段丘地帯」である。高鍋町を含む宮崎平野中北部（小丸川および一ツ瀬川の両岸）には新生代第四紀洪積世に形成された河岸・海岸段丘の台地が拡がっており、西の険しい日向山地と対照的に平坦な地形が続く特徴ある景観となっている。これらの段丘は現在複雑に



第3図 段丘地帯模式図および分布図

開析されており、いくつもの谷や低地が入り込んでいる（第3図）。

こうした段丘地帯は先土器時代から人々の生活の場となっており、数多くの遺跡が所在している。なかでも西都原古墳群（国指定特別史跡）は大規模な古墳群として名高い。他に新田原、茶臼原、持田（高鍋町）、川南などの国指定史跡の古墳群も営まれており、全国でも有数の古墳集中地域である。西都原・新田原古墳群中には、古墳時代の南九州に特徴的な「地下式横穴墓」が点在しており、その分布の北限域となっている。また、「横穴墓」は段丘の浸蝕崖に多数穿たれており、中でも装飾のある土器田横穴は著名である。古代には西都原の南東に日向国府がおかれ、中世には段丘から延びた丘陵上や開析により半ば独立した高地に穂北、都於郡、高城、財部（高鍋町）などの山城が築かれている。

大戸ノ口第2遺跡の所在する牛牧台地は段丘群中の三財原面に相当し、本遺跡の内容は、段丘地帯における歴史の流れに必然的に合流するものと思われる。牛牧台地上やその近隣では先土器時代から中世にいたる遺跡が数多く確認されており、大戸ノ口地区にある円墳5基（第2図）をはじめ、小規模ながら古墳群も点在している。また、小丸川を隔てた台地とその下の低地には古墳総数86基（前方後円墳12基、円墳74基）からなる持田古墳群が、その西には川南古墳群（川南町）がある。横穴墓は老瀬、光音寺、下永谷、正祐寺の各地区の浸蝕崖に営まれている。本遺跡の谷を隔てた直南の丘陵上には、南北朝時代に土持氏によって築城された山城で、近世に修築されて秋月氏の居城となった財部（のちに高鍋）城跡がある。

なお、大戸ノ口遺跡中の第3遺跡では、昭和44年に行われた県教育委員会の調査により、弥生時代後期の竪穴住居址が1軒と土器や石包丁などの遺物が出上している。

また、町内所在の遺跡については、「高鍋町遺跡詳細分布調査報告書」（高鍋町文化財調査報告書第4集、1989年）に詳しく記載されている。

第3節 遺跡確認調査

遺跡確認調査は、造成区域に当たる東西2本の丘陵について行なっている。それぞれ東区・西区とし、合計14箇所にトレーンチ（試掘坑）を入れて調査した（第6図）。

東区は、牛牧台地の最東南端の舌状丘陵で、北半には台地上へ続く平坦面が拡がっている。この平坦面に4箇所トレーンチ（T7～10）を入れたところ、いずれも表土直下に5～12cmのアカホヤ層が確認され、その下の褐色土層の上部（層上面から20cm前後のレベル）には多数の焼跡と縄文時代早期の土器片が検出された（第5図2）。

また、東区東南には古墳と見られる円形の高まりがあり、それに関連した遺構の確認のため周辺に4箇所(T11~14)のトレンチを入れたが、周溝等の明確な遺構は確認できなかった。この際、11~13トレンチでは斜面に厚く堆積した黒色土層の下位からアカホヤ層直上の位置より縄文時代中期の土器片数点が山上している(第5図3・第10図)。

西区は、南東に延びる舌状丘陵で、6箇所トレンチ(T1~6)を入れたが、表土直下から第2オレンジ層(姶良・丹沢火山灰)が検出されるなど、どのトレンチでも、この区域がかなりの削平を受けていることが確認された(第5図1)。

以上の結果から、縄文時代早期の遺跡が確認された東区については本調査を行う必要があると判断された。

II 調査の概要

第1節 発掘調査の経過

本調査を実施することになった東部の丘陵は、遺跡確認調査の際には杉などの雑木が繁っており、トレンチを入れる作業も容易ではなかった。丘陵の東南部には「こ」の字形に築かれた幅2~3m、高さ1~2mの土壘があったが、土壘内の低地には土管や近代の遺物が散在しており、近代の所産と思われた。旧地主の話によると、この地は約20年前までは畠として利用され、2軒の民家が建っていたが、その後荒れ地になったという。土壘は、戦時中に高射砲設置のため築かれたということである。

伐採終了後、調査は重機による表土の除去作業から開始した。確認されている遺跡はアカホヤ下の縄文時代早期のものであり、同時にアカホヤを除去してもさしつかえないと思われたが、遺構の有無を確認するため掘削はアカホヤ上面までに留めた。重機は北から南に向かって作業を進めたが、途中、調査区北半の平坦部では中央東西に土層確認のためのベルトを残し、これ以北をA区、以南をB区と設定した。また、調査区南西の緩やかに傾斜する丘陵先端部をC区、土壘のある南東部をD区と設定した。

B区では、東端部の表土に多くの須恵器片が集中して露出していたので、この周辺を避けて表土を除去した。須恵器は、ほぼ一個体分の大甕片と坏片などで、土師器片も含まれていた。南東部の円墳に関連するものともみられるが、民家や畠地のあったことをかんがえると周辺で出土したものと括り廃棄したものと思われる。

D区はすでにかなりの掘削を受けているようであり、掘り上げた土は両脇の土壘を築く

際に用いられたらしい。重機による表土除去の際には土塙も共に除去した。

重機作業と併行して、表土除去の終わったA区から作業員による表土剥ぎ及びアカホヤ面検出を開始した。この作業は、木根と繁ったササの根茎のため難行し、予定外の時間を費やすこととなった。まもなく土塙の輪郭や土塙墓に副葬された鉄刀・十師器が現れ、確認調査からの予想に反して遺構の存在が確認されたので、調査区全面のアカホヤを検出・精査することにした。その結果、住居址、土塙、溝状遺構、配石遺構などが検出された。

この間、遺構実測の便宜を計るため10m×10mのグリッドを設置している。

C区では、南東の斜面の表土を除去する際に縄文時代の土器（中期が主）や石器、剣片などが多数出土している。これらはなだれ込みの遺物とみられ、一括して取り上げた。

D区では、表土剥ぎ終了後、南東端の円墳に伴う周溝の有無を調べるために精査したが、確認調査時と同様、遺構は確認できなかった。中央表土下には第2オレンジ層が現れ、包含層がすでに失われていることが確認されたので、D区の調査はこの時点で終了した。

9月中旬にはC区からアカホヤと褐色上上層の除去を開始した。開始後すぐに南西端ではアカホヤ下に夥しい疊群が現れ、その中に集石遺構と早期の上器片多数が検出された。その後A・B区も掘り下げを開始したが、時間の制約等のため調査区全面の疊群を検出すことはできなかった。

同じく9月中旬、造成工事のための取り付け道路が敷かれる西側丘陵基部の平坦部について建設課と協議の結果、試掘調査を実施することになった。その結果、深く削平されているにもかかわらず褐色上層で住居址が検出されたので本格的に調査を実施することになった。この区域はE区と設定し、調査により17軒の住居址（主に古墳時代後期）が確認された。

以上の本調査は11月17日をもって終了したが、以後、造成工事開始までの期間に補足的な調査を行なっている。さらに造成工事中には、工事区域の拡張にともない、丘陵最南端部（F区と設定）の調査を12月18日～1月10日までの期間実施した。試掘調査の結果から、アカホヤ下の縄文時代早期の散疊レベルのみ調査した。

第2節 層序

基本層序と検出された遺構・遺物の概略を下記の第4図に示した。また、遺跡確認調査および本調査における土層確認トレンチの観察図の一部を第5図に掲載した。

各々の詳細については次章で報告するが、E区については本書で報告しないので概略の

み次に述べる（E区は図版1参照）。

E区の住居址検出面は、縄文時代早期の集石遺構のあるレベルの直下とみられ、少量ながら疊の点在が認められた。住居の埋土中にもA～F区の疊群と同種の疊の流入がみられたことから、E区においても早期の生活面があったものと考えられる。

E区の住居址は深い削平のため壁面の残存状態が悪く、辛うじて床面の残るもののが半数近くであった。17軒のうち1軒は弥生時代後期の住居址で、他は古墳時代後期～末のものである。古墳時代の住居は方形プラン・4本柱の張り床で中央付近に炉（一部埋め戻）を持つものを基本としている。その他、かまどを持つ住居が3軒、かまどの痕跡と思われる白色粘土面の認められるものが2軒確認されている。

I. 表 土

II. アカホヤ層

平担部のA・B区では上部を前半され10cm前後しか残存せず丘陵先端部のC区では2次堆積とみられる深ったアカホヤが厚く堆積（約30cm）

III. 暗褐色硬質土層

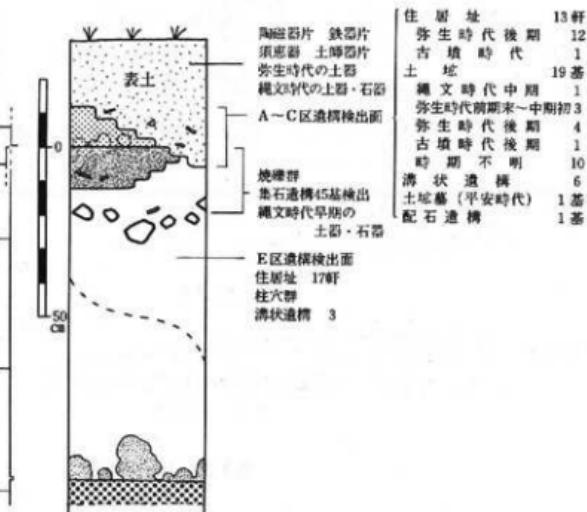
小白斑が見られる
別名 カシワバン

IV. 褐色硬質土層

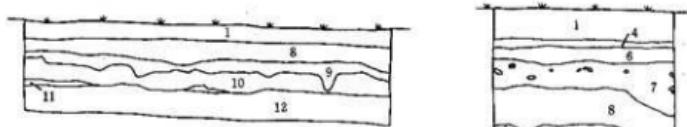
褐色硬質土層
暗灰褐色硬質土粒を含む、
特に最下部ではそのブロックが密で層状になっている部分もある

V. 第2オレンジ層

（姶良・丹沢大山灰層）

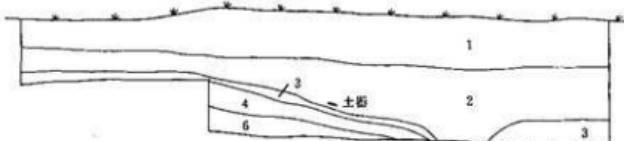


第4図 基本土層模式図

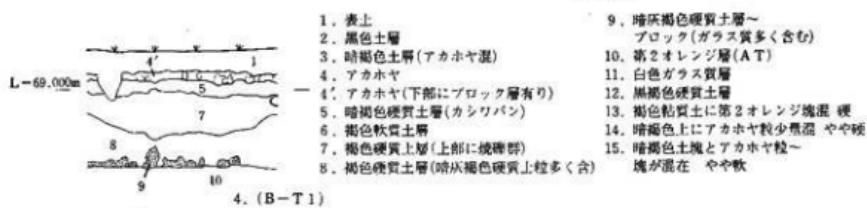


1. (T 3)

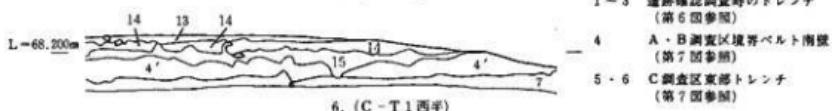
2. (T 7)



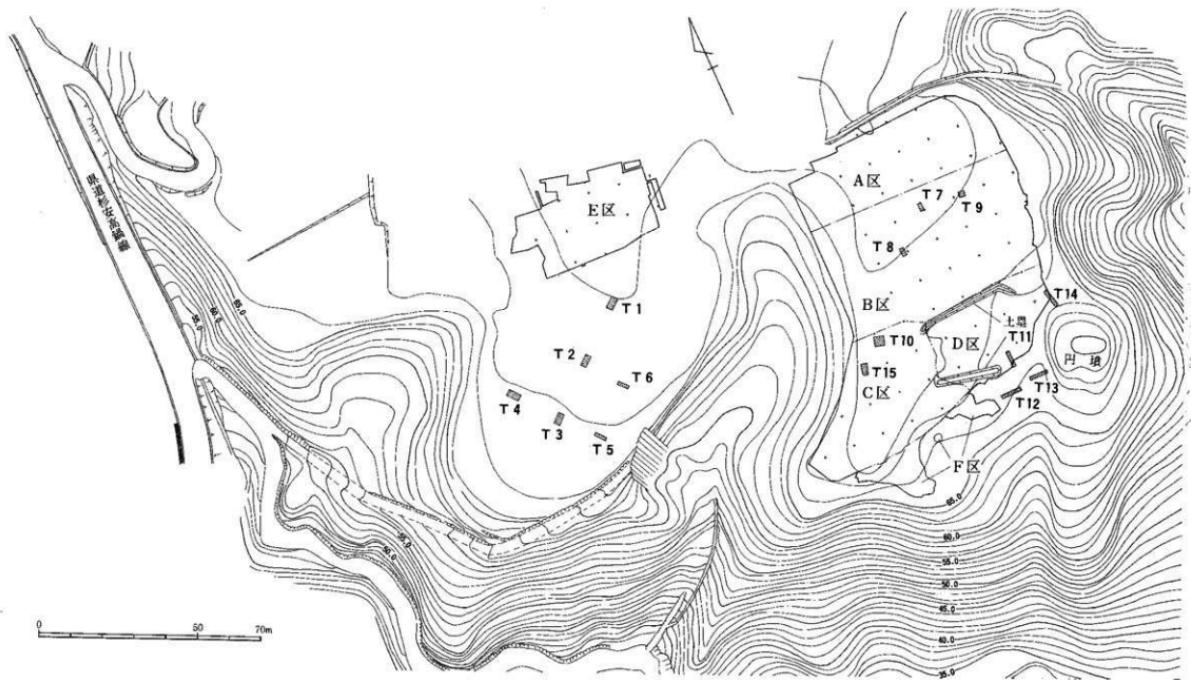
3. (T 13)



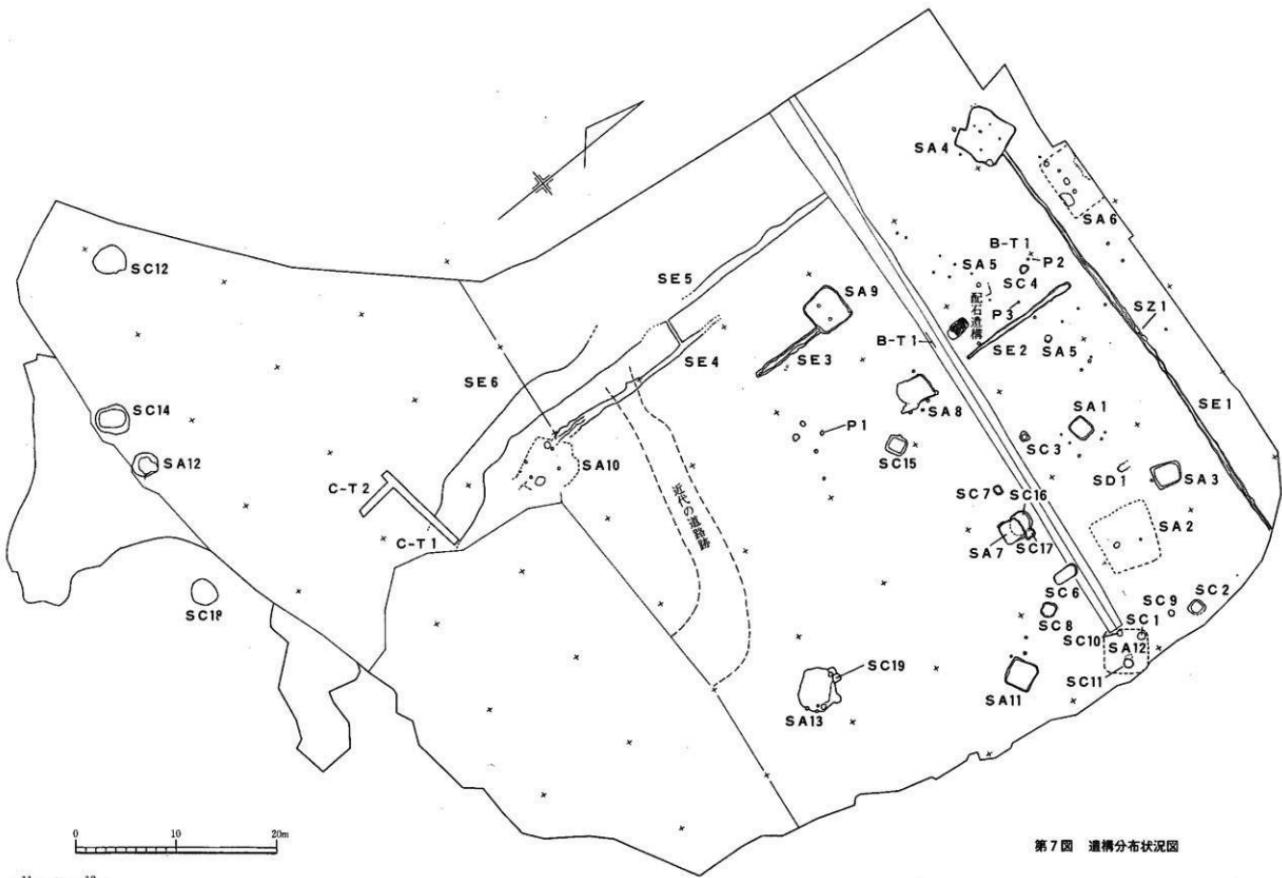
5. (C - T 2)



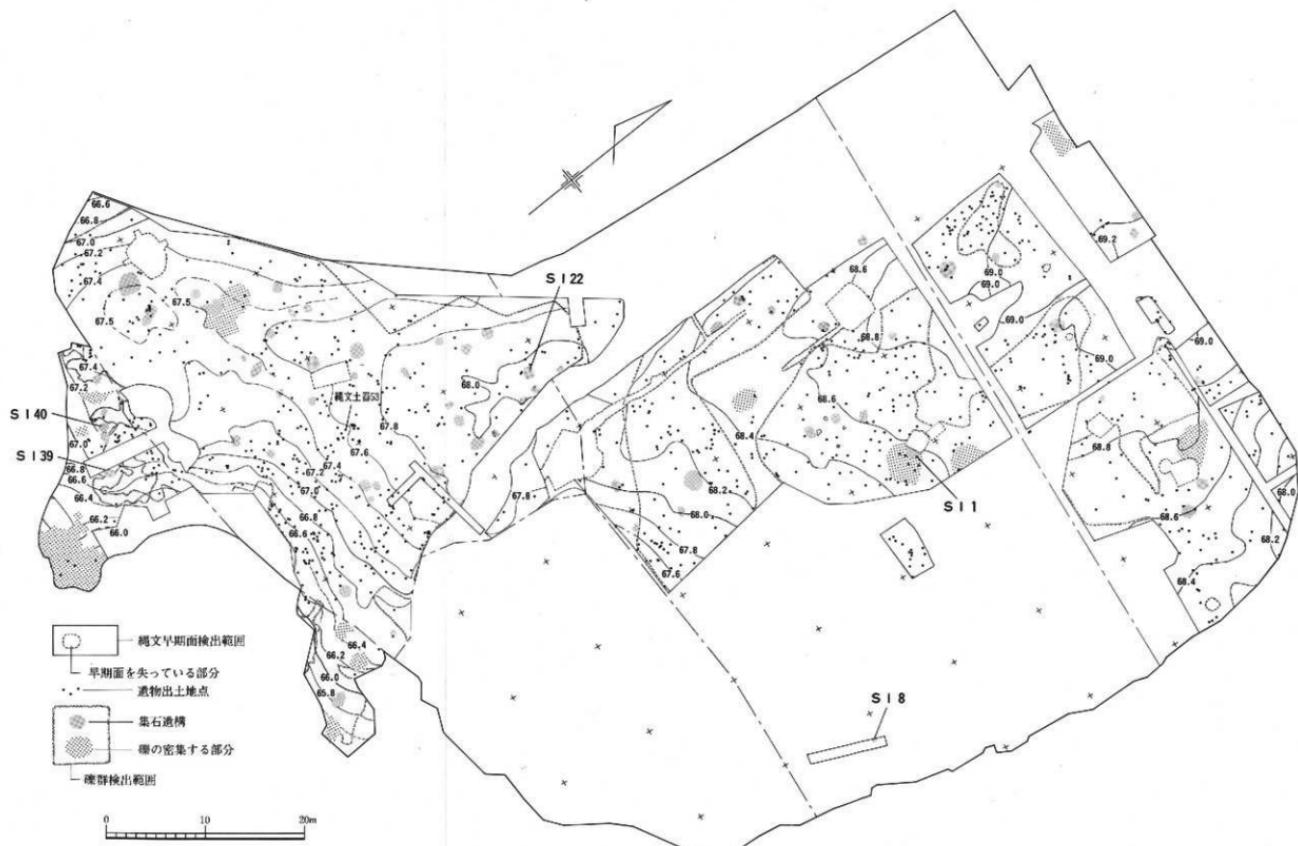
第5図 土層観察図



第6図 造跡確認調査トレーンチおよび発掘調査区配置周辺地形図



第7図 造構分布状況図



第8図 集石造構および遺物検出状況図

III 調査の結果

本遺跡で検出された遺構と遺物は、第4図に示した通りである。E区の住居址群については整理作業が中断しているので調査結果の報告は後の機会に譲りたい。以下、各時代ごとに検出した遺構と遺物について報告する。

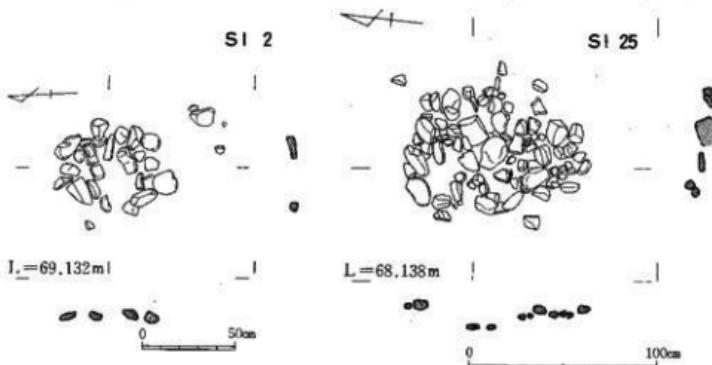
第1節 繩文時代の遺構と遺物

I. 遺構

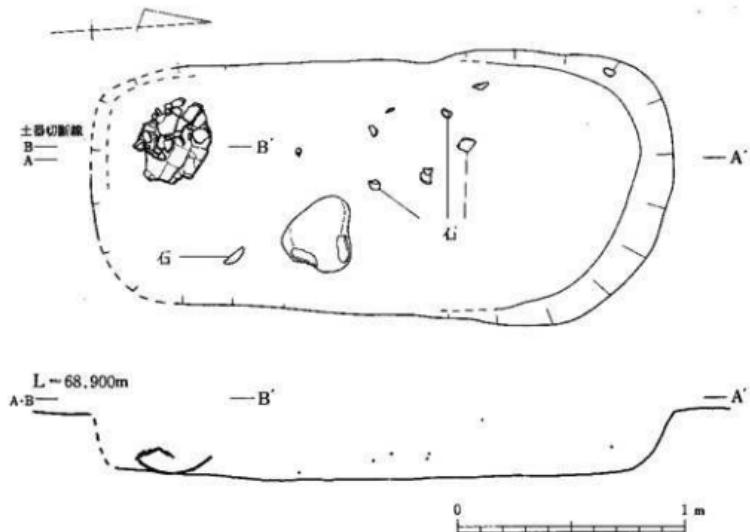
縄文時代の遺構は、褐色土上層の散疊群レベルで検出された縄文時代早期の集石遺構約45基とアカホヤ面で検出された縄文時代中期の上塙1基(SC 6)である。

集石遺構は、時間的な制約等により規模と分布状態の調査および写真撮影を実施したのみで、掘り込みの有無やその比率、内部の疊の集積状態など詳細は十分把握できなかつた。散疊群のレベルでは縄文時代の遺物が多数出土しており、集石遺構の調査結果と合わせて、散疊の範囲と状態、遺物の出土状況を第8図に示した。集石遺構のうちSI 2・25の2基のみ実測している(第9図)。SI 8からは小型の石斧が出土している(第22図、図版16)。

SC 6(第10図、図版5)は、長軸2.55m、短軸1.13m、深さ0.28mの隅丸長方形の土塙である。埋土は上層が褐色土粒混じりの黒色土で、下層が黒色土塊、褐色土粒の混じる暗褐色土である。遺物は、土塙南西隅で検出された縄文時代中期のキャリバー形の



第9図 SI 2・25実測図



第10図 SC 6 実測図

土器（第18図91）と、底面から埋土中にかけて出土した縄文地の土器片約20片がある。また、底面に長径34cmの偏平な石が置かれていた。遺構の形状は、掘り下げ時に損なわれた部分がある。

C地区中央では、散疊の間でキャリバー形の土器（第16図53）と全面条痕を施した土器胸部が出土している（第12図）。後者は脆弱なため接合・実測ができなかった。これらは早期の土器とは考えにくいので、遺構検出の困難な土壙等の掘り込みがあったものと思われる。

2. 遺物

(1) 土器（第11・13～18図、図版11～15）

大戸ノ口第2遺跡出土の縄文土器はアカホヤ層を挟んで上下の二時期に大きく分ける。下位は早期、上位は前期、中期である。

(ア) アカホヤ下の土器群

出土土器の内、主な土器を分類すると6類程に分けられる。

・1類 押型文土器 (第13・14図1~27)

器形的文様的に種々バラエティーに富んでおり、特徴をまとめると次のようになる。

細別	部 位	器 形	文 様			実測図番号
			外 面	内 面	口 脣	
A	口 縁 部	外 反	楕円(縦)	縦平行条痕楕円(横)	なし	1
	口 縁 部	外 反	楕円(縦)(小粒)	縦平行条痕山形(横)	なし	2、3
B	口 縁 部	外 反	山形(横)	山形(横)	なし	5
	口 縁 部	外 反	山形(縦・横)	山形(横)	なし	6
C	口縁部下	外 反	楕円(横・ベルト状施文)	楕円(横)	欠落	4
D	口縁部下	外 反	格子目	格子目	欠落	8、9
	胴 部	-	格子目	-	-	12
	底 部	平 底	格子目	-	-	13
E	口縁部下	外 反	格子目(ネガティブ?)	山形(横)	欠落	7
	胴 部	-	格子目(ネガティブ?)	-	-	11
F	口縁部下	外 反	楕円(ネガティブ)	山形(横)	欠落	10
G	口 縁 部	直 口	山形(横)	山形(横)	山形(横)	14
	胴 部	-	山形(横)	-	-	15
H	口 縁 部	やや内湾	山形(縦)	なし	なし	16
	口 縁 部	やや内湾	山形(縦・横)	剥落	なし	17
I	胴 部	-	重複格子目	-	-	20
J	口 縁 部	外 反	粗大格子目	畝状凹線文	-	22、23
K	口 縁 部	外 反	粗大楕円	凹線文	-	21、24、25
	胴 部	-	粗大楕円	-	-	26、27

以上のようにA~Kまで細別することができるが、県内の押型文土器の出土状況をみた場合、大戸ノ口第2遺跡の特徴として格子目文(D、E)、ベルト状施文(C)、ネガティブ楕円文(F)、高山寺式(J)、田村式(K)の出土をあげることができる。

また、胎土を観察するなかで織痕のある土器を確認することができた。

• 2類 貝殻文施文円筒形土器（第15図28～42）

押型文土器との層位的な違いを確認することはできなかったが、4種の土器群が出土した。吉田式（28、29）、前平式（30～35）、波状文施文（36～38、42）、桑ノ丸式（39～41）である。

• 3類 龍状工具による縞杉状条痕文土器（第15図43、44）

• 4類 竹管による列点状刺突文土器（第15図51、52）

• 5類 平行細条痕文土器（第15図50）

• 6類 塞ノ神式土器（第15図45～49）

(4) アカホヤ上の土器群

アカホヤ上の土器群の大きな特徴はキャリバー形の口縁部の出土であり、轟式、曾畠式、阿高式の出土はない。その多くは瀬戸内地方との関係の強い一群である。

• 1類 （第17図77～90）

口縁部が直立またはわずかに内湾する土器で、口縁部に平行に2～3条の突帯を貼りつけ、口唇部に細かな刻みを有し、体部にも突帯を巡らす一群（77）と、波状口縁で波状に細かな突帯を巡らせ、かつ、突帯間に1条の条痕を施し、条痕の波頂部から垂直に刻み目突帯を施した一群（81）がある。前期に属するものとみられ轟式の系統を引くものであろう。

• 2類 （第16図63）

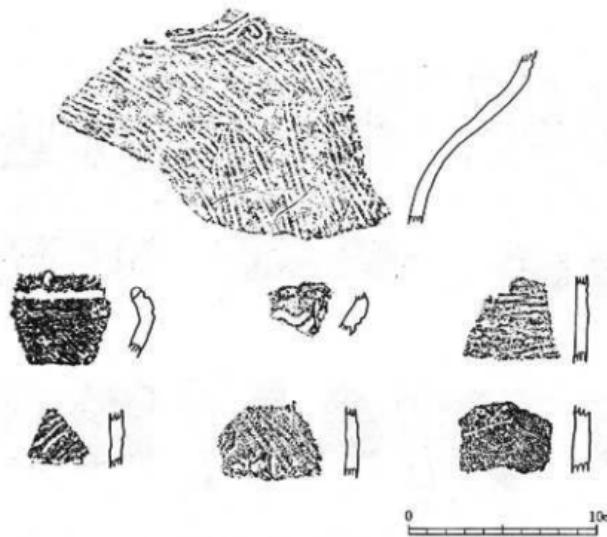
口縁部が内湾する土器で、地文に縄文を施し、突帯上にも縄文を付けたものである。口唇部の内外にもわずかな貼りつけがみられる。前期に属するものであろう。

• 3類 （第16～18図53～62、64～69、71、72、91、92）

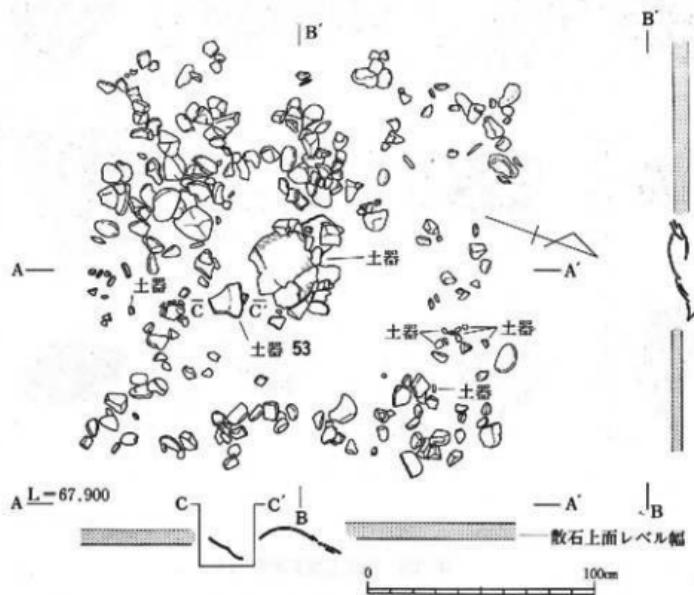
口縁部がキャリバー形に内湾する土器で、主文様を口縁部にもつ土器群である。刻み目突起を貼りつけたもの（53、54、56、64）、細い粘土紐を粗雑に波状に貼りつけたもの（57）、箇または半截竹管による波状等の沈線を巡らすもの（55、58、59、62）、貼りつけ突帯上に貝殻の背を押圧したもの（60、61）などがある。これらの内、53～55、60、61、71、72には地文として撚糸または縄文が見える。中期前半の在地化した船元式系の土器群であり、春日式に共通したものもみられる。

• 4類 （第17図76）

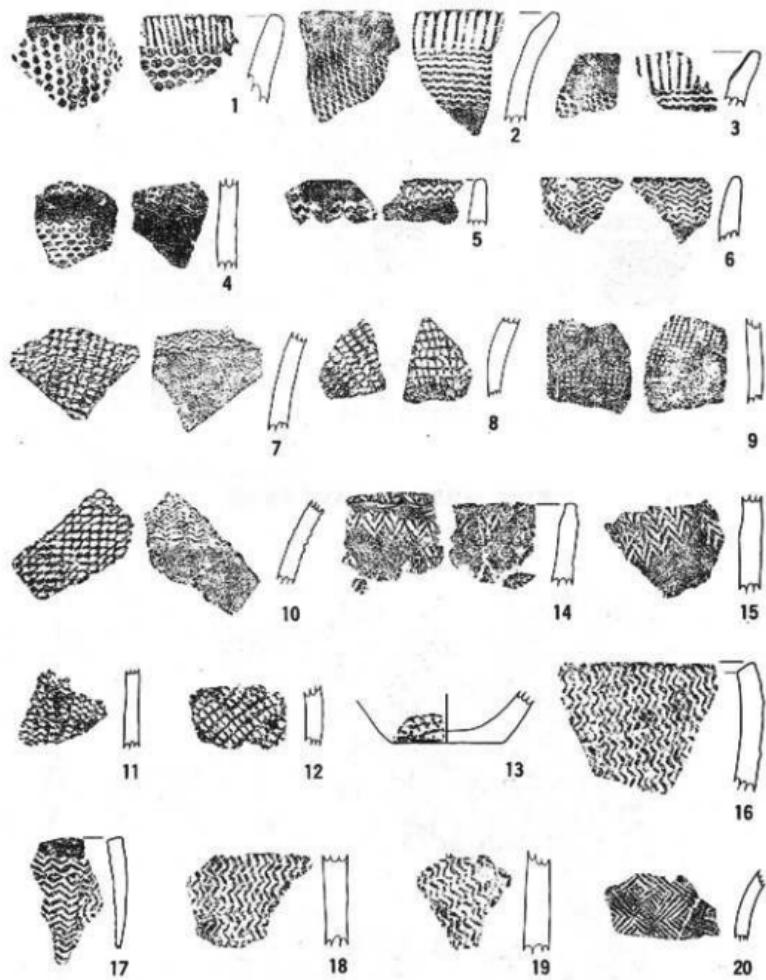
わずかに内湾する土器で、凹線化した曲線を施している。3類に後続するものである。



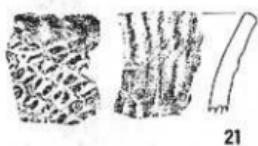
第11図 確認調査時出土縄文土器実測図



第12図 縄文土器53出土状況図



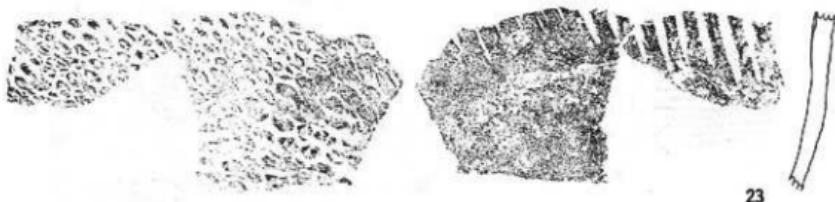
第13図 捺文土器実測図 (1)



21



22



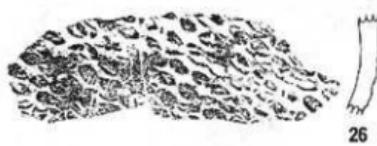
23



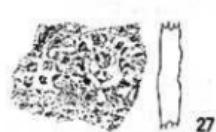
24



25



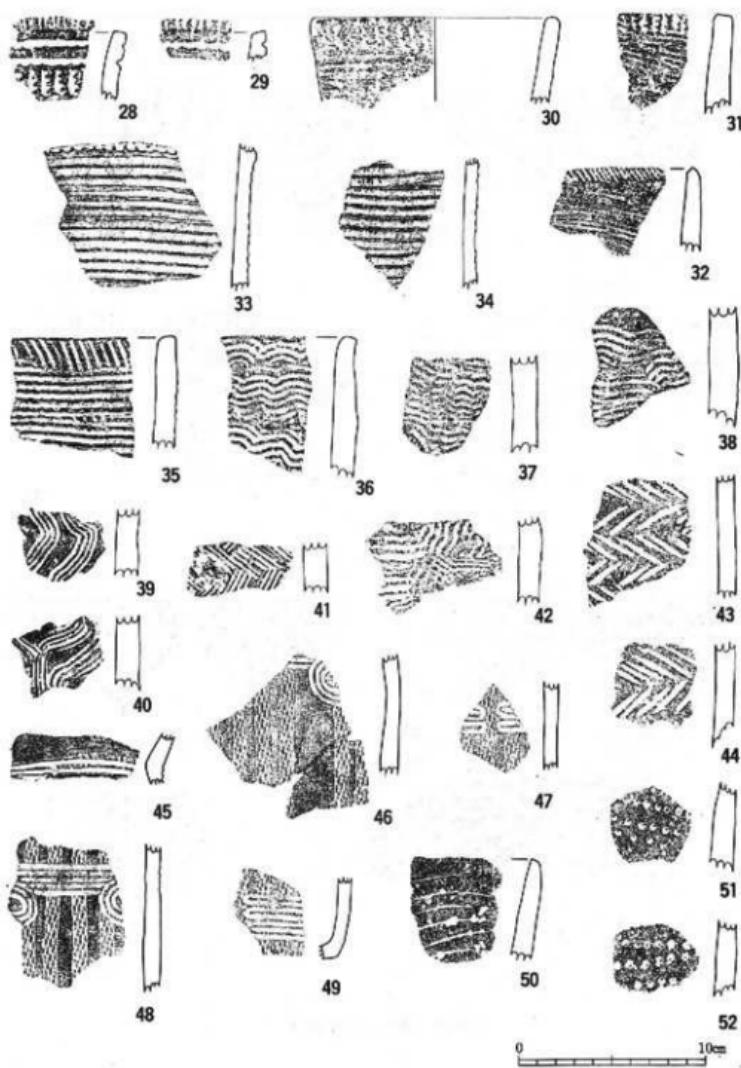
26



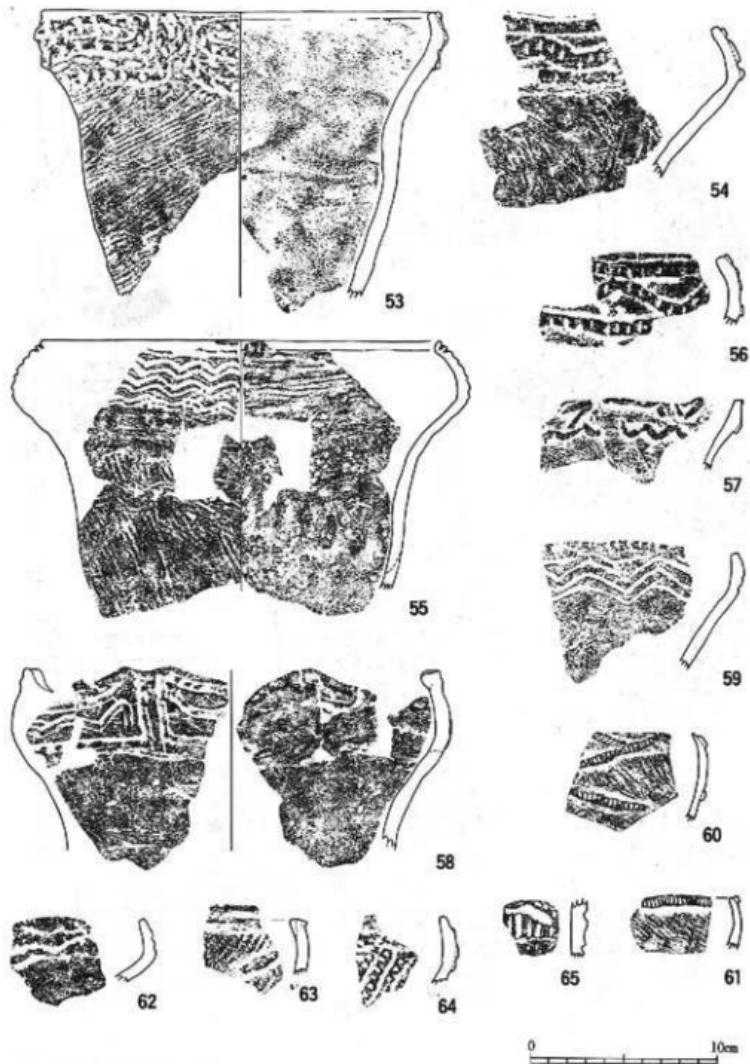
27



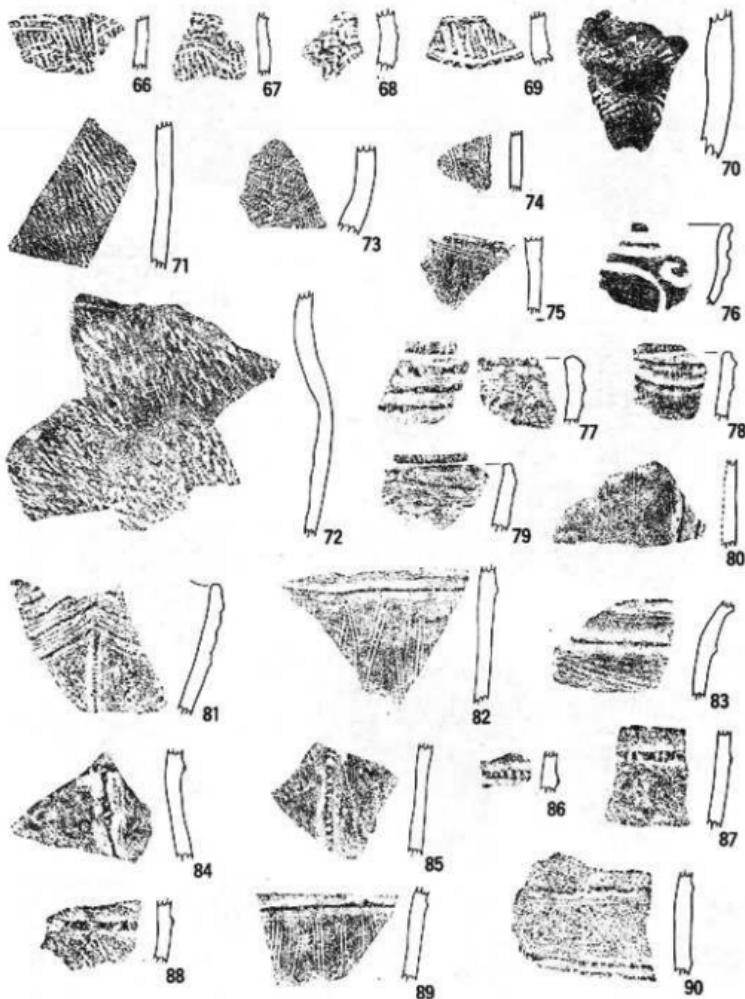
第14図 繩文土器実測図(2)



第15図 縄文土器実測図 (3)

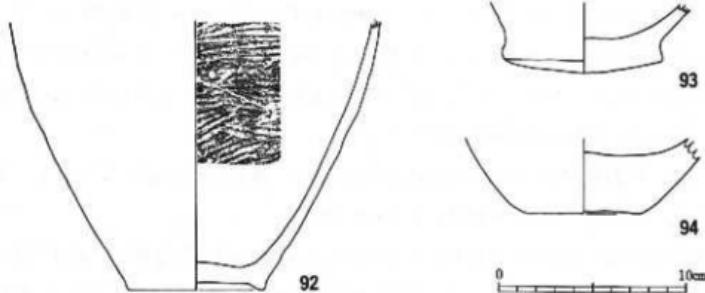
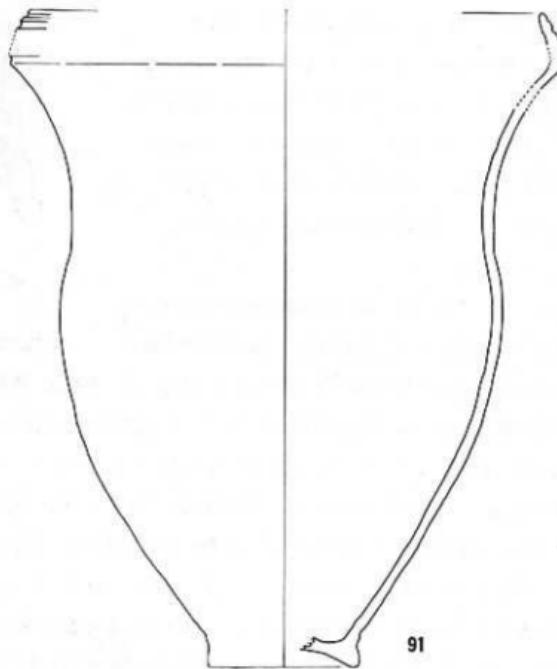


第16図 繩文土器実測図 (4)



0 10cm

第17図 繩文土器実測図 (5)



第18図 縄文土器実測図 (6)

(2) 石器

縄文時代の石器は、褐色土上層の早期包含層（散疊間）および表土や後世の遺構の埋土中（混入）などから出土している。石器の種類と出土点数は、石鏃32、石鏃未製品1、石錐1、石匙6、石皿1、石斧8、円形搔器1、磨石15、有孔石製品1、凹み石1などがある。また、縄文時代の遺物と断定できないものに、小型石斧1があり、石錐7つについても縄文時代のものだけを選び出すことが難しい。

石鏃は黒曜石やチャートの他、頁岩などの石材がみられ、黒曜石には大分県の姫島産のものが含まれる。それぞれの形態と石材については第20図に示した（基部の形状をもとに分類）。石鏃の中には、長い脚部を持つ長三角形の鐵身にペン先状の先端部を作り出した特異なものもみられる（第19図）。これはSA10の埋土中より出土したものでチャート製である。

石錐と石匙（第21図）はC区南東斜面の表土中（アカホヤ上）より出土したものである。石錐は黒曜石製で錐部を欠き、握部に自然面と剥片剥離面を残す。石匙はいずれも横形で、石材は頁岩（2・3・5）・ホルンフェルス（泥質、4・6）を用いている。

石皿は散疊間で磨面を上に向かって状態で出土し、一部赤変。砂岩製で重量12.05kg。

礫斧は磨製のもの2（第22図8・10）、片面に疊の自然面を残した打製のもの4（11など）、その刃部のみを研磨したもの2（9・12・9の刃部表面は風化している）この他、小型の斧の可能性も考えられる疊の自然面を残した剥片の先端を研磨しただけの簡単な石器1も出土している。石斧の石材は頁岩や泥質のホルンフェルスを用いている。

加工具としての石器は、これらの他に円形の搔器が1点ある。これは11の石斧と同様疊から剥ぎとった剥片の周囲を調整している。

装身具と思われるものに13の有孔の小円盤がある。極細粒の砂岩を用いており、丁寧に研磨して仕上げている。垂飾であると考えられる。

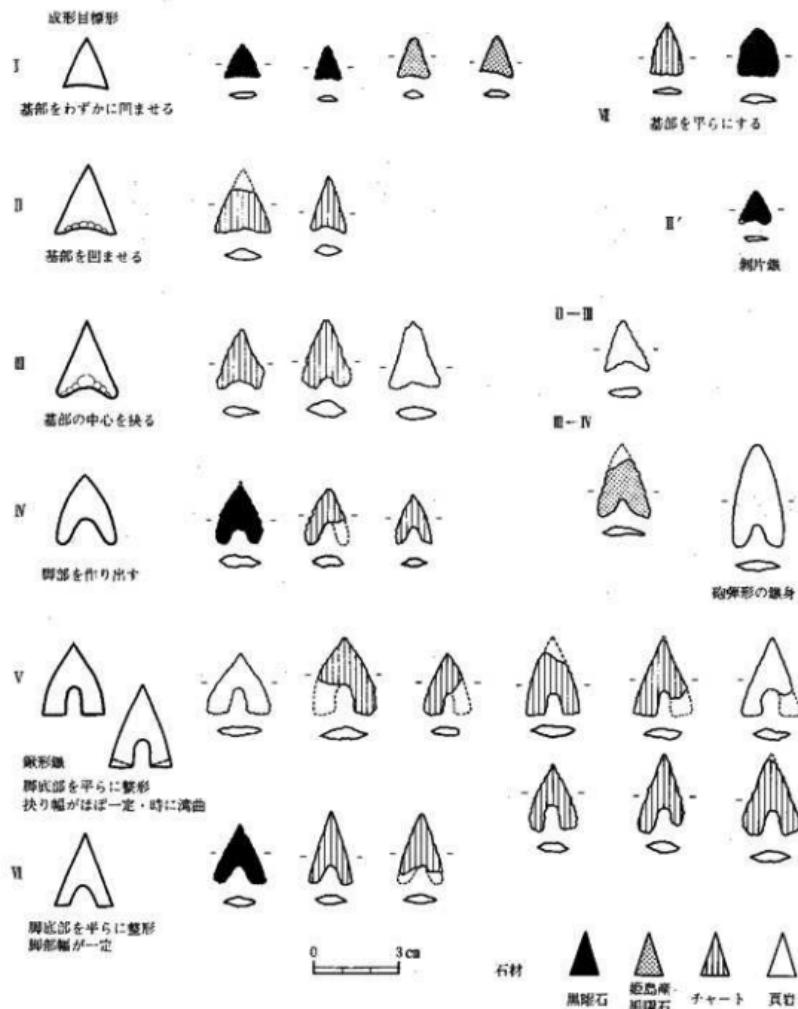
石錐（第23図）は砂岩や頁岩を主とする円～椭円形の扁平な疊を用いており、打ち欠く部位によって3種に分けられる。疊の長軸方向の両端を打ち欠いたもの49点、短軸方向の両端を打ち欠いたもの（5～7、10・11、15～17、20など）21点、両軸の四方を打ち欠いたもの（1・19・21）4点である。重量は13～150gで、28～55gに集中している。

以上の石器の他、黒曜石円疊（径3.7cm）1、黒曜石やチャートの剥片・2次加工の

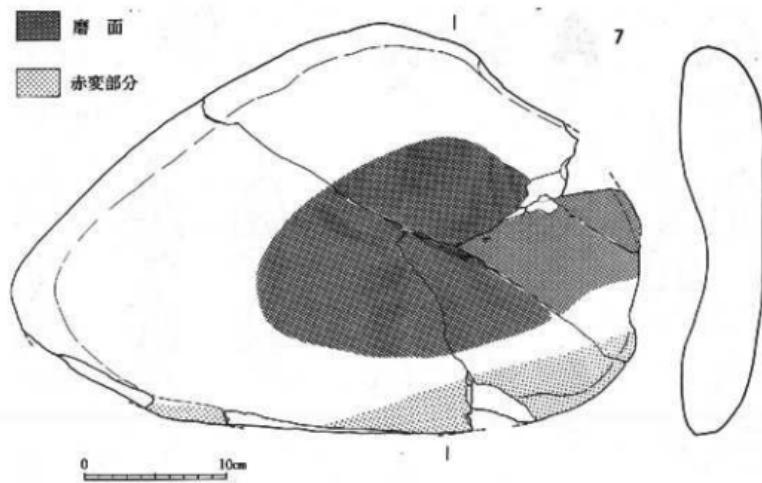
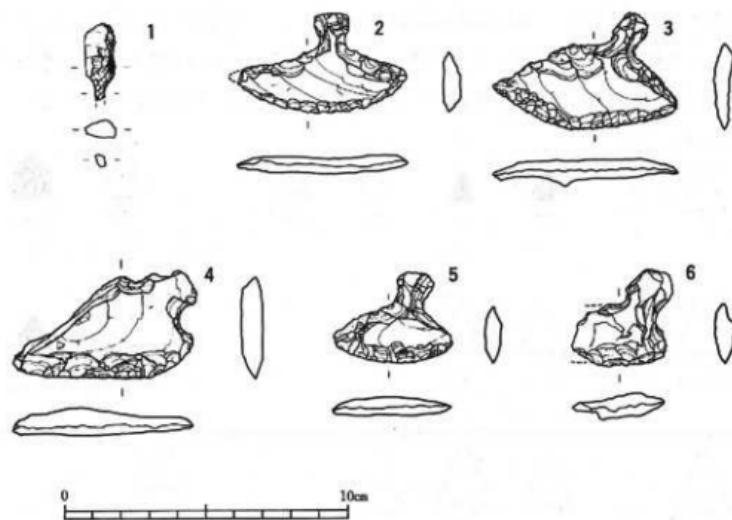


第19図 異形石鏃実測図

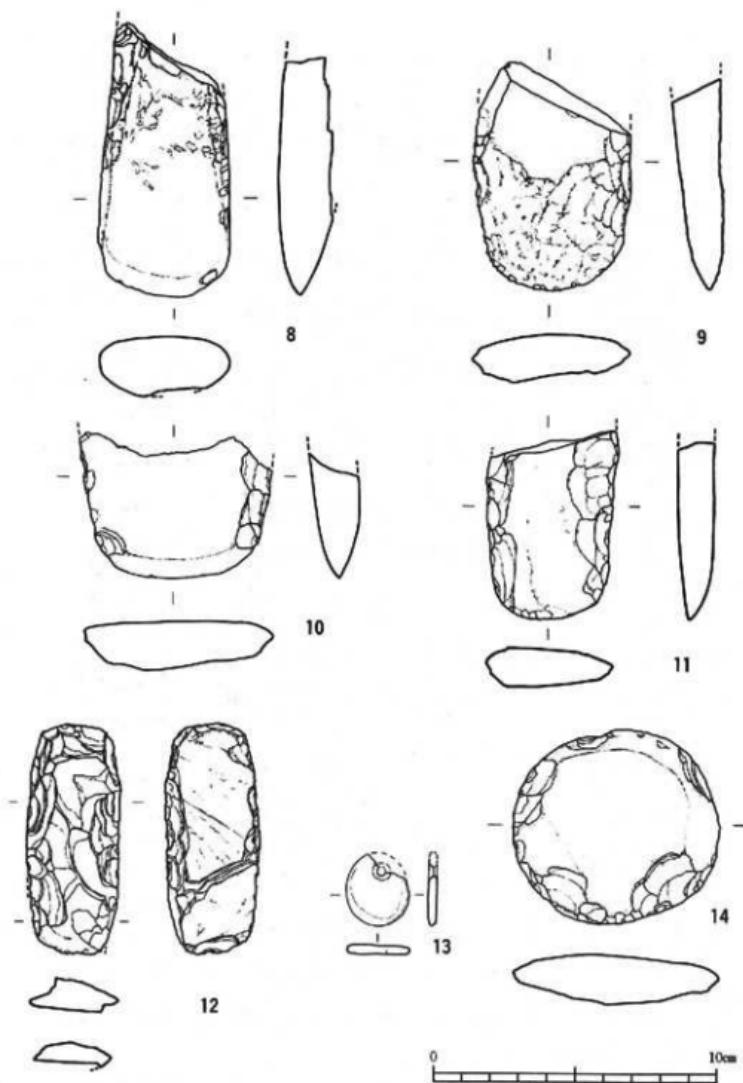
ある剝片約170点、尾鈴山酸性岩類を主体とする石器未製品・礫に加工を加えているもの
 • 2次加工のある剝片（これらは明確に区別できない。それ自体で石器として使用されたものも含まれる可能性がある。）約35点、石器の原材とみられる岩塊や石片・剝片約130点、出土岩類中特異な淡緑色の光沢のある円錐2（石材不明）などが出上している。



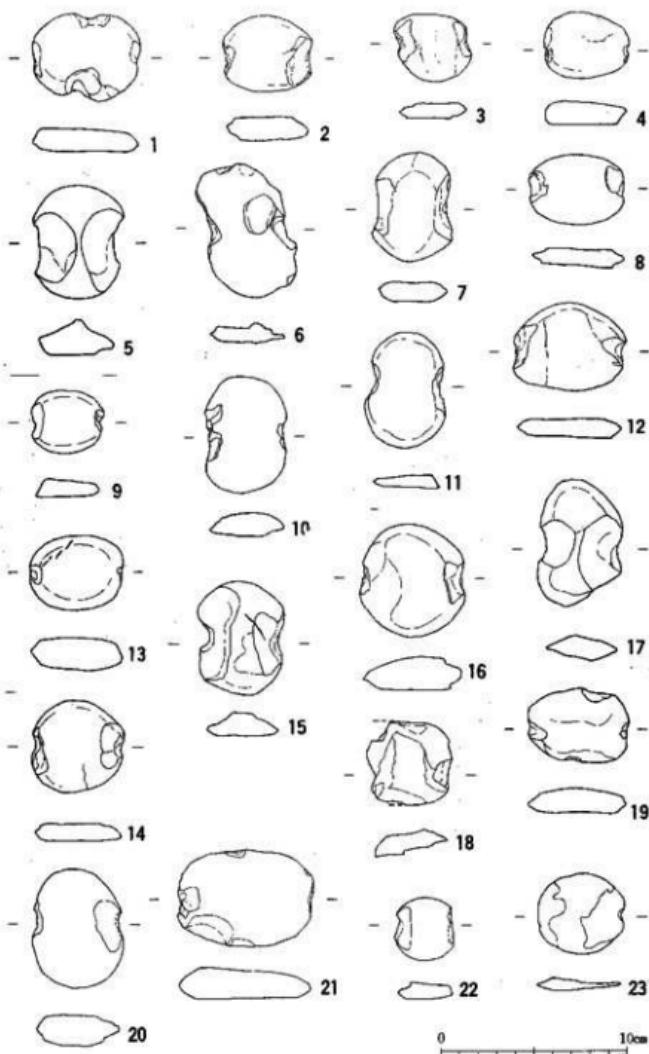
第20図 石器分類図



第21図 石器実測図 (1)



第22図 石器実測図 (2)



第23図 石器実測図(3)

第2節 弥生時代の造構と遺物

1. 土塙

弥生時代と決定できる土塙は7基検出されている。各造構の概略は下記の一覧表に示した。SC1・10・11はA・B区境界の東端にあり、近接している。これら3基の土塙に囲まれた地点では弥生時代の土器片が散乱して出土し、焼土の拡がりが見られることから住居址の床面と判断、12号住居址（SA12）とした。3基の土塙はこの住居址に伴う可能性が大きいので、詳細についてはSA12の項で述べることとする。

SC12・13・14はC区の南部にあり、いずれも同型式の土器を伴っていることから同時期に使用されたものと考えられる。SC13・14はC区の南端境界部で検出され、2m弱の距離をおいて隣接している。これら3基の土塙と同時期の住居址は検出されていない。

SC15はB区北部中央で検出されている。以下、各造構について詳述する。

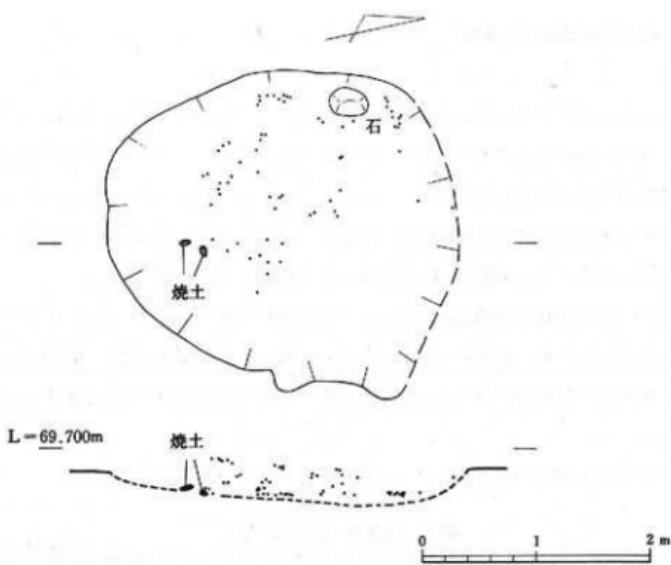
表1 弥生時代の土塙一覧表

() 内数値は推定

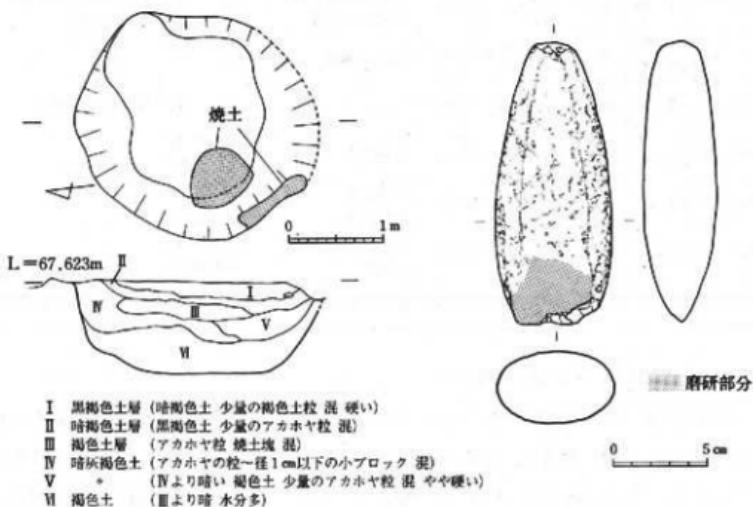
土 塙 番 号	平面形	規 模	出 土 遺 物	推定時期	備 考
		長軸×短軸×深さ(m)			
SC1	円 形	0.63 × 0.62 × 0.19	土塙内に遺物なし 上面に土器片	後 期	S A12内の土塙と 考えられる
SC10	不 整 円 形	0.63 × 0.55 × 0.26	複合口縁壺(口縁)	後 期	同 上
SC11	円 形	(0.85) × (0.85) × (0.28)	壺(上半)	後 期	S A12内土塙?
SC12	不 整 円 形	3.18 × 2.64 × (0.24)	下城式甕	前 期 末 ～中期初	
SC13	円 形	2.48 × 2.44 × 0.78	下城式甕 磨製石斧	前 期 末 ～中期初	
SC14	長円形	3.40 × 2.90 × 1.08	下城式甕・短頸壺 壺底部	前 期 末 ～中期初	
SC15	方 形	1.95 × 1.83 × 0.75	甕・複合口縁壺	後 期	北壁にピット有

SC12 (第24・27・28図、図版6)

SC12は浅い不整円形の土塙である。周囲の土と埋土は、両者に明瞭な差が認められないことから判別が困難で、造構の輪郭は水分の含みの違いや周囲の焼跡の分布状態から肉眼で分かり得る最大限のラインで判断した。また、土塙の底面も遺物や焼土塊の出土レベルから推定した。造構の規模を考えると小型の住居址の可能性もあるが、傍証に乏しい。

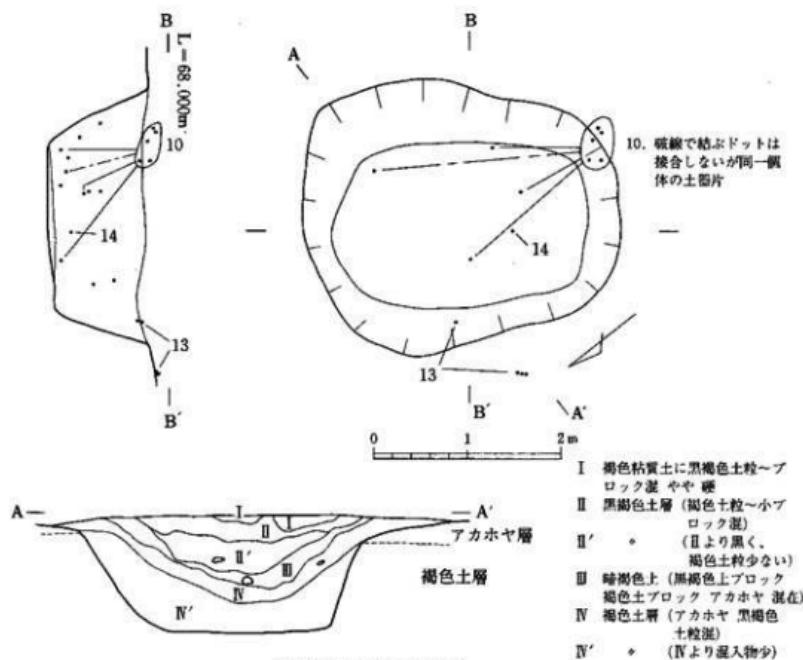


第24図 SC12 実測図

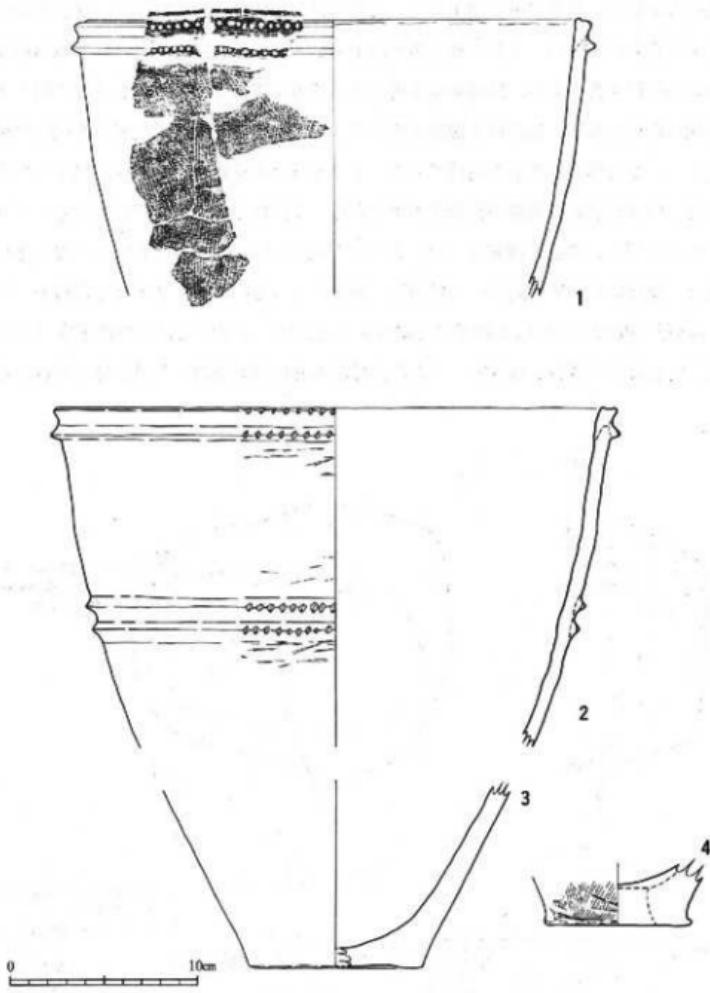


第25図 SC13 造構・出土石斧実測図

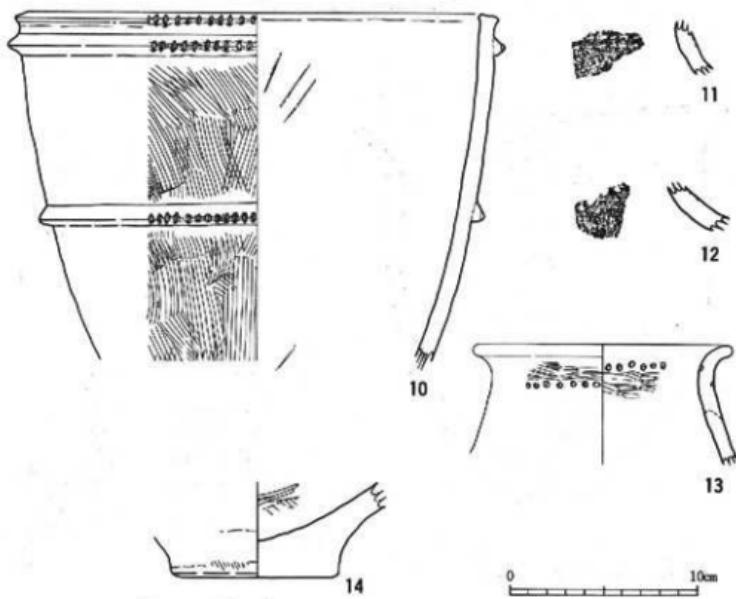
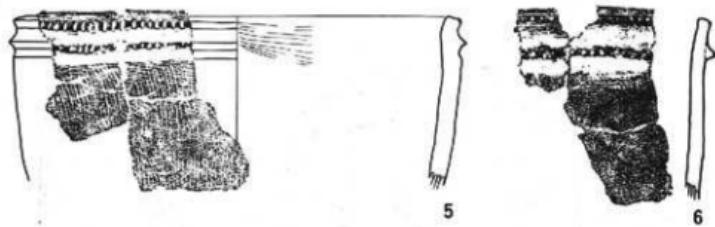
遺物は、口唇外部および口唇直下や胴部に貼り付けた突帯に刻み目を施した下城式の壺のみが破片の状態で多数出土した。これらは3個体に分けられるが、接合復元できた部分は意外に小さい。3個の壺（第27図1・2・3、第28図5）は、いずれも口縁に2条の刻み目突帯をもち、口唇部の中央には、外方に突帯をつまみ出した際の横ナデによる凹みが見られる。刻み目を観察すると2、5では口縁上下突帯の刻みを同時に施工しており、2は胴部の2条も同様である。1、5は突帯を持った胴部片が出土していないので、口縁部以外の突帯の有無は不明である。突帯はどれも横ナデによりしっかりと付けられている。外面の調整は、SC 13・14でも出土している同じ下城式の壺片と照合すると、綻ないし斜め方向のハケ目調整が基本となっているが、2・3は板目での幅1.6cm程の板状の工具により綻なで調整をしており、下部(4)ではその後丁寧にナデしている。内面はナデ調整が基本で、3のみ口縁部内面に横方向のハケ目が見られる。4は1



第26図 SC 14 実測図

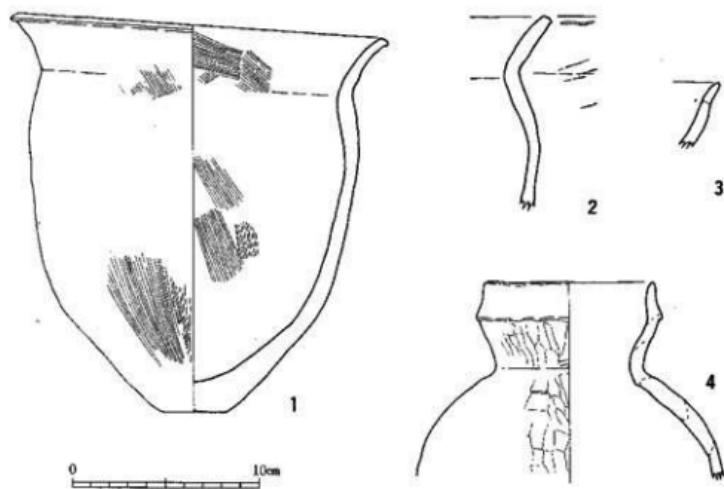
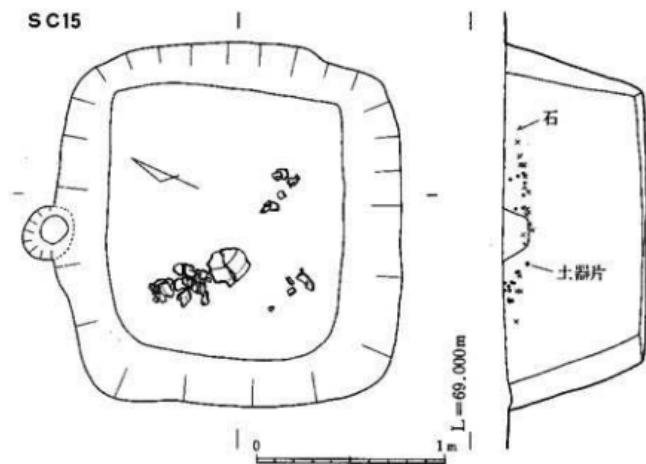


第27図 SC 12 遺物実測図



第28図 S C12・13・14 遺物実測図

SC15



第29図 SC15造構・遺物実測図

の底部と思われる。

これらの土器の胎土は、すべて粘土に丸みのある細緻（川砂か。径3mm前後が最多）を多く混じており、これは弥生時代を通じて窯の胎土に一般的に（少なくとも県内では）見られる特徴である。

SC 13 （第25・28図）

SC 13は円形の土壇である。土壇の用途は一般的によく分かりにくいものであるが、この土壇では床面西南隅およびその上部の壁面に炭化物粒の混じる焼上がり、また、埋土から焼粘土塊が検出されており、土壇内で火が使用された可能性を示唆している。

遺物は、埋土Ⅲ層から床面にかけて、下城式の壺片（6～9）、壺と見られる外面を丁寧に磨いている土器片、壺口縁片、器種不明の弥生土器片、磨製石斧などが出土している。壺片はSC 12のものと同じ製作技法によるが、口唇直下の突帯の下部はなで付けが不十分で粘土の浮きが見られる。また、口唇部の形状に個体差が見られる。11はヘラにより短線を連続して施文している壺片で、外面は丁寧に磨かれている。頭部から肩部にいたる部分のものとみられる。SC 14でも同様の壺片が出土しているが（第28図12）、胎土に若干の違いがある。磨製石斧は中流の砂岩製で、片面の刃部のみ研磨されている。その他の部分は全体に丁寧な敲打成形痕が残り、ごく一部に軽い研磨痕が観察される。刃部先端は欠損しているが、剥離面は新しい。長さ15.0cm、最大幅6.2cm、最大厚3.9cm、重さ524gである。

SC 14 （第26・28図、図版6）

SC 14は深い長円形の土壇である。埋土の様子は自然堆積を思わせるが、土壇上場の南隅で土壇内にただれ込むような形で出土した下城式の壺と底面近くで出土した土器片とが接合したことは興味深い。土壇壁面上から落ち込む際に一部草木などに支えられて留まり、埋土が徐々に堆積していったものと考えられる。

上述の下城式の壺（第28図10）は胴部に1条の突帯をもち、口縁の2条は同時に刻みを付けている。内面は幅広の板状の工具で調整した後ナデている。SC 13の壺と同様、突帯下部のなで付けは不十分である。遺物はこの他13の壺口縁～頸部、14の壺底部、12のヘラ描き文のある壺片（前述、SC 13の項）などがある。13は外反する口縁から頸部に移行する部位の内外に刺突列点をめぐらせており、器面調整は、口縁内外面は丁寧なナデおよび横ヘラ磨き、頸部は外面磨き（単位不明瞭）、内面ナデである。14は外面縦ハケ毛のちナデ、内面は横方向の磨きおよびナデで、暗灰色である。

SC 15 (第29図)

SC 15は方形の土塹である。埋土は全面黒色で壁面から底面にかけては褐色土粒が少量混じる。遺構検出面から20cm下のレベルにかけて土器片と礫が出土しているが、この土塹に伴うものと断定することはできない。しかしながら、埋土が比較的短期間に埋積したと見られることから土器の時期を土塹の時期と考えて大過ないと思われる。北壁のピットは性格不明。後世のものの可能性もある。

1はほぼ完形の壺である。器壁はやや風化しているが胴部内外面に縦ハケ目、口縁内面に横・斜めのハケ目が観察される。上半外面にスス付着。2は1と同形の壺片。3はミニチュアの壺または鉢の口縁部。4は上方に立ち上がる複合口縁の壺で、調整は、内面および口縁部外面はナデ、外面頸部～胴部は縦方向の粗い磨きである。胎土は比較的緻密である。

表2 弥生時代の住居址および竪穴状遺構一覧表

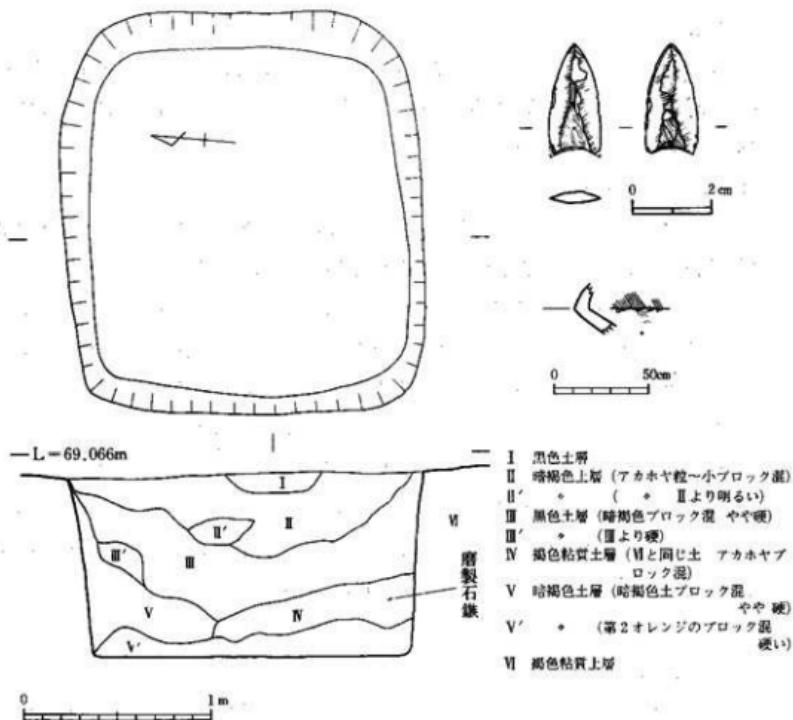
規模の()内数値は推定

住居番号	平面形	柱数 (主柱)	規 模 長軸×短軸×深さ(m)	床面積 (m ²)	備 考
SA1	方 形	-	2.13 × 2.09 × 0.93	3.0	竪穴状遺構
SA2	方 形 ?	(2)	(5.9) × (5.3) × -	-	
SA3	方 形	-	2.70 × 2.22 × 0.54	4.3	竪穴状遺構
SA4	方 形 張り出し部有	4 (2)	4.62 × 4.54 4.96 × 0.25	20.5	
SA6	方 形 ?	(4?)	(3.15) × - × -	-	
SA7	方 形	-	2.22 × 2.17 × 0.62	4.1	竪穴状遺構
SA8	不 整 形 (方形?)	-	3.23 × 2.53 × 0.06	7.1	遺構外にピット
SA9	隅丸方形	(2)	3.77 × 3.72 × 0.36	11.4	
SA10	?	(4?)	- × - × -	-	
SA11	方 形	-	2.80 × 2.75 × 0.27	5.8	焼土の高まり有り
SA12	方 形 ?	-	(4.4) × (4.3) × -	(18.4)	
SA13	不 整 形 (方形?)	-	4.3 × 3.5 × -	(8.7)	

2. 住居址

弥生時代の住居址は12件検出された。それらはA・B区の平坦部に分布しており、とくにその北半に集中している。半数の住居は、すでに深い掘削によって壁面が失われておらず、床面のみの調査となつた。また、柱穴の検出できたものは少なく、主柱2本のものが3軒、4本と推定されるものが2軒確認されただけである。住居は規模も規格もまちまちであるが、SA 1・3・7は比較的深い竪穴状の遺構で柱穴がなく、ほとんど遺物が見られない点が共通している。これら3軒は居住が目的ではない。貯蔵庫や簡単な倉庫、作業場といった住居に準じる建物の跡と考えられる。

出土遺物を見ると、住居はすべて後期後半の時間幅に納まるようである。7軒で同様



第30図 SA 1 遺構・遺物実測図

の在地製とみられる粗い平行線の叩き調整の壺が出土しており、同時期の住居であることを示唆している。それぞれの住居の概略は表2に示した。

SA 1 (第30図、図版7)

SA 1は第2オレンジ層まで掘り込んだ深い竪穴である。埋土V層の褐色土は南壁からかまぼこ状に張り出した形で堆積していた。遺構検出レベルがアカホヤ下の褐色土層上面レベルで遺構輪郭に崩れのことや、V層の断面形状から、南壁の褐色土が崩落して流入したとは判断しにくい。何らかの目的で褐色土をつき固めて造り出しを設けたことも考えられる。遺物は、V層断面で磨製石鎌が、埋土上層より弥生時代後期と思われる壺頸部片と胸部2片が出土している。したがって、遺構の時期は両者の時間になろう。遺構周辺にピットが5穴検出されたが、底面レベルがまちまちで、この住居に伴うものと断定できない。

磨製石鎌は粘板岩製とみられ、上半の側縁部ではさらに刃部を丁寧に研ぎ出している。基部先端がわずかに欠ける。現存長2.8cm、最大幅1.3cm、厚さ2.7mm。壺頸部の調整は外面縦方向ハケ目、内面ナデ。

SA 2 (第31・32図、図版6・17・18)

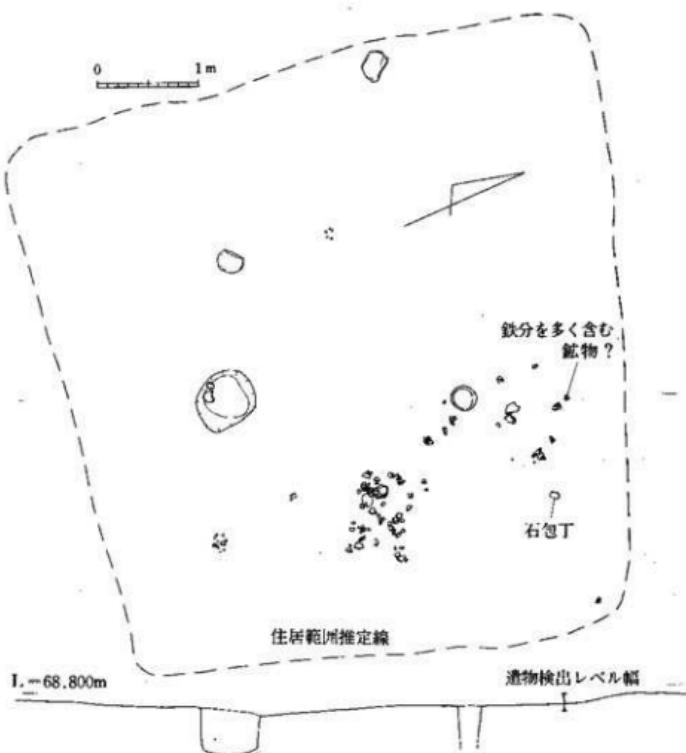
SA 2は床面のみ残る住居である。表土下に土器片の散在するややにごった面が検出され、住居と思われたので精査後掘り下げた。遺物は、口唇部に凹線に入る小型の壺(1. 内外とも風化部分多。外面磨き?内面ナデ)、口縁部から胸部径最大位置にかけて櫛描波状文、刺突列点文、2条の沈線の文様が施された無頸壺(2.脚台付か。調整は風化のため不明瞭)、壺(3.外面縦磨き、内面風化)、高環坏部(4.外面横ハケのち縦磨き、内面丁寧なナデ)、壺(5.外面全体にスス付着。口縁部内外とも左上がりの目の細かいハケによる調整。胸部は外面ススのため、内面風化のため不明)、鉢?脚台部(6.全体ナデ調整)、叩き調整の壺片、丹塗り土器片など多数の土器片が出土した。この他、両端に抉りのある方形の石包丁、径5.5cm厚さ2cm重さ60gの鉄分が多く含む塊(褐鉄鉱か)が出土している。主柱は2本である。住居の範囲はわずかな土色の違いから推定した。

SA 3 (第32・33図)

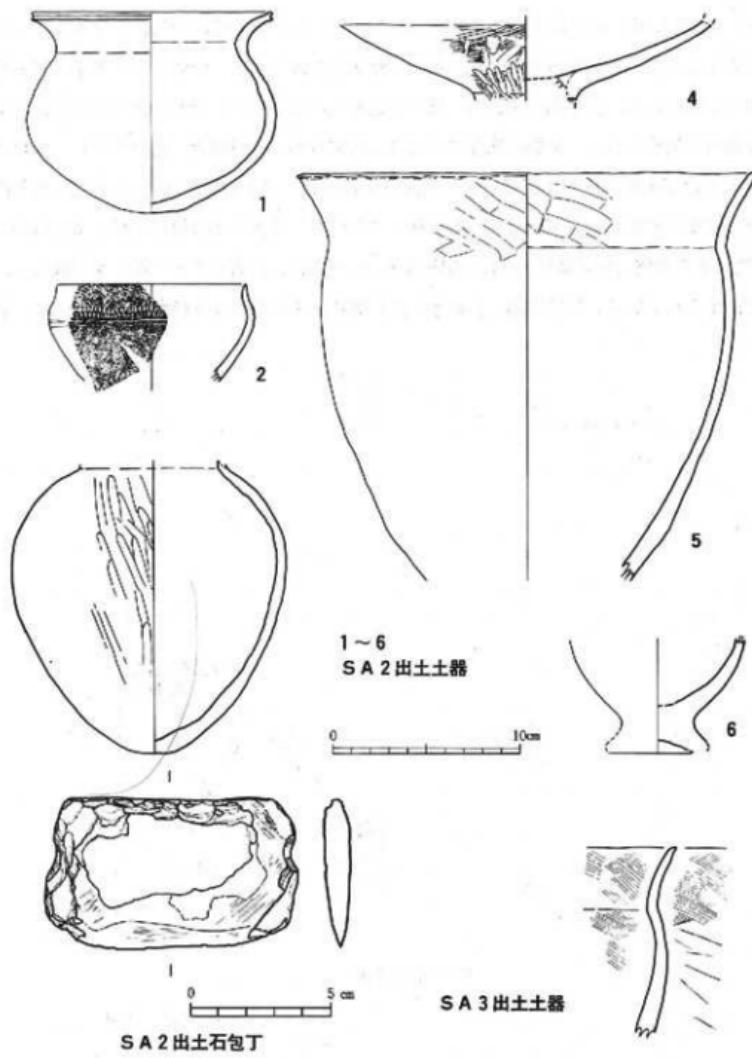
SA 3はSA 1と同様の深い方形の竪穴である。柱穴は検出できなかった。遺物は埋土から壺片が出土している。調整は内外とも左上り斜めハケ調整。胸部外面ではその上をナデておりハケ側縁の圧痕が残る。西壁では炭化材が落ち込む形で出土している。

SA 4 (第33・34図、図版 7・16・18)

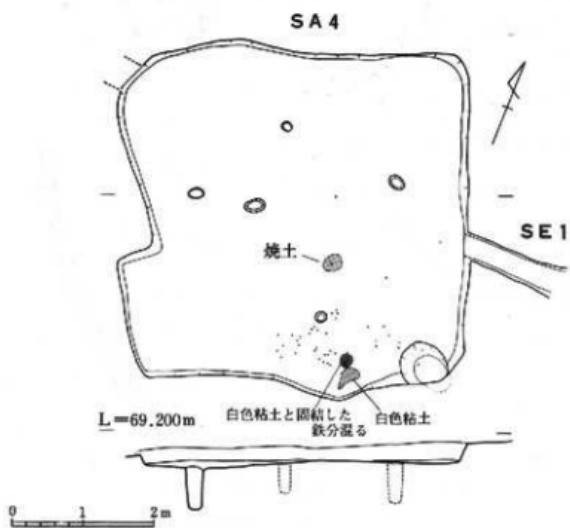
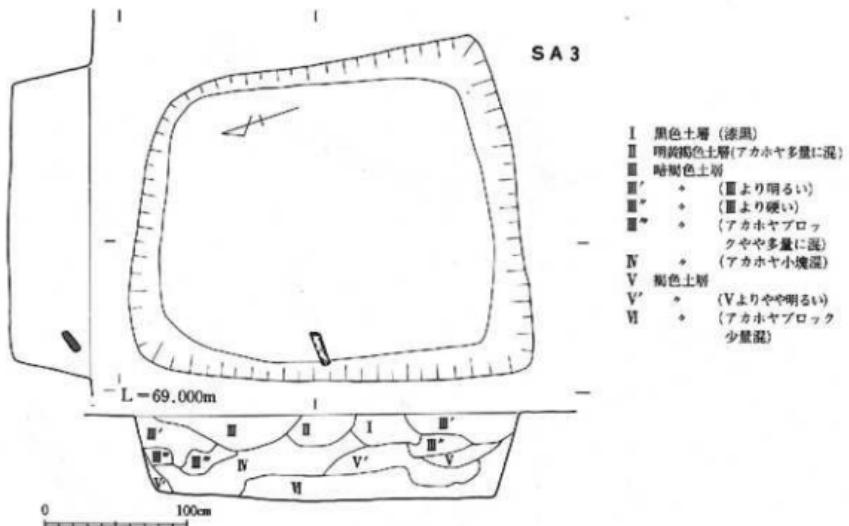
SA 4 は張り出し部のある方形の住居である。主柱は 2 本で補助的な柱が 2 本立てられていたようである。遺構埋積後に溝 SE 1 が掘り込まれている。床面は固く締まっており、中央に炉跡がある。南壁側中央には、薄い白色粘土の抜がりと、それに鉄分の染み込んでいる部分が観察された。遺物は床面で高坏（2.脚部外面のみ縦磨き、他はナデ）、高坏坏部（1.外面下部縦ハケ・上部横ハケ、内面風化著しい。磨きの痕跡残る。）鉢（5.外面磨き。単位不明瞭）、甕下半（6.外面全体にスス付着。外面上半は板状工具による斜めナデ、他はナデ調整）、叩き調整の甕（4）、甕底部（3.外面磨き、内面ナデ・一部ハケ目残る）、などが出土している。住居東隅の斜め下方向に掘り込まれたピットは貯蔵穴とみられ、甕



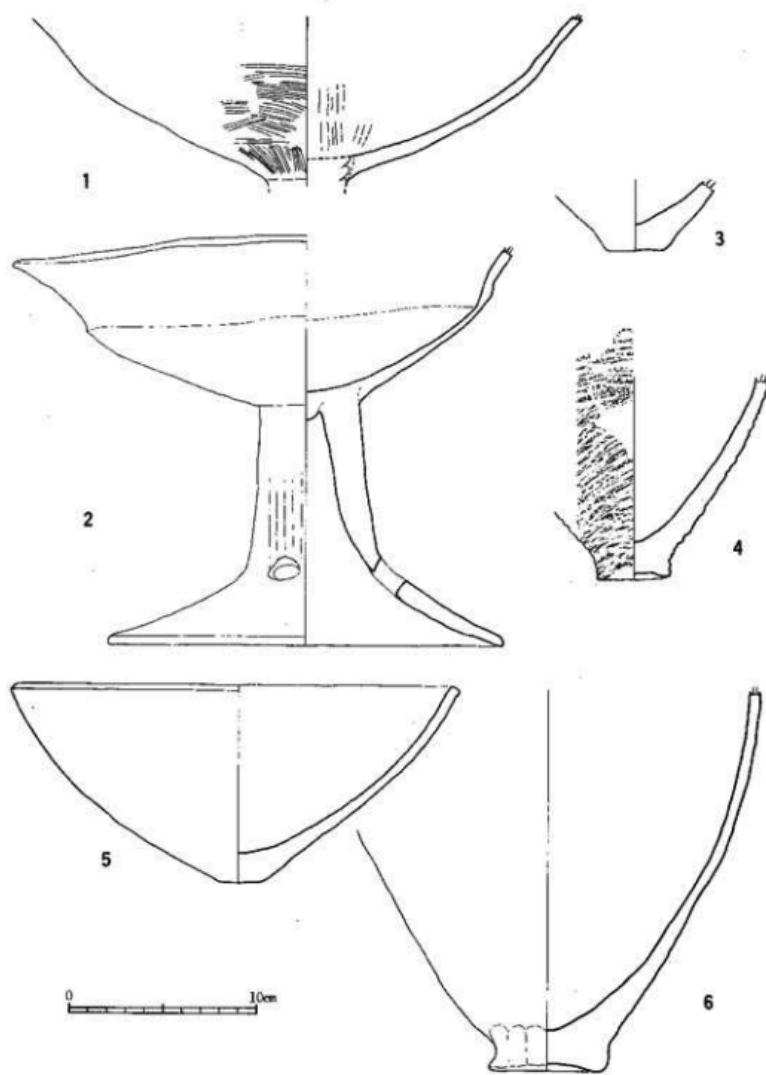
第31図 SA 2 実測図



第32図 SA 2・3 遺物実測図



第33図 SA 3・4 実測図



第34図 SA 4遺物実測図

片が出土している。

SA 6 (第35図、図版7・18)

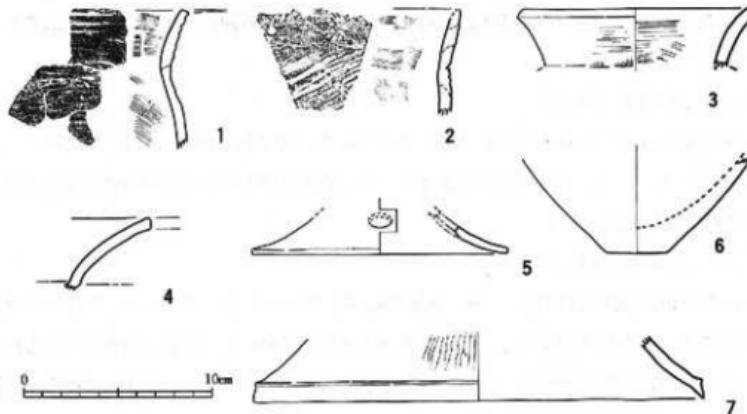
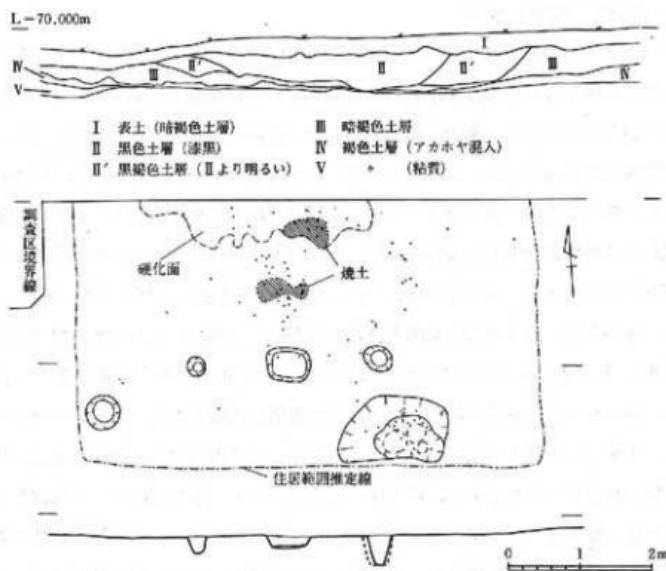
SA 6は床面のみ検出した。北半は調査区外のため不明であるが、約1m北には近年まで台地の東側の麓から台地上に上がるために利用されていた堀状の道があり、住居の北壁は失われているようである。調査区域境界の断面に住居の壁が現れると期待していたが、明確な境界線は観察されなかった。すでに深い搅乱を受けているようである。床面は表土剥ぎ作業中、黒色土直下に固く締まった面と上器片が現れて確認された。硬化面南側には、炉跡と思われる焼けて赤変した部分がある。柱穴は2本検出されたが、炉の位置から主柱4本の住居が想定される。壁面が検出できなかつたため住居の範囲は正確に捉えられなかつたが、床面の土の潤りのある範囲を推定範囲とした。遺物は床面の他、柱穴間に検出された方形の浅いピットとその南東の壁寄りに掘られた小土塹からも出土した。西隅のピットは、他のピットと同質の埋土であったため遺構図に加えたが、住居に伴わない可能性もある。出土した土器には高環壺部片(4.口唇部および内面ナデ。外面は風化。口径11cm内外と思われる)、やや小型の高環壺部(5.全面ナデ)、器台壺部?(7.類例がないので上下不明確。縁辺部ナデ調整。上部は内外面とも縁ヘラナデ)、壺底部(6.柱穴間ピットより出土。外面ナデ、内面風化)、壺口縁(3.外面縁・横ハケ、内面横・斜めハケ、口唇部横ナデ)、叩き調整の甕(1・2、1は外面全体にスス付着、口唇部ナデ、内面横・斜めの細かいハケ、2は内面横・斜めのハケ後ナデ、口縁外面は粘土紹織ぎ目未調整)、鉢口縁片2などがある。

SA 7 (第36図、図版8)

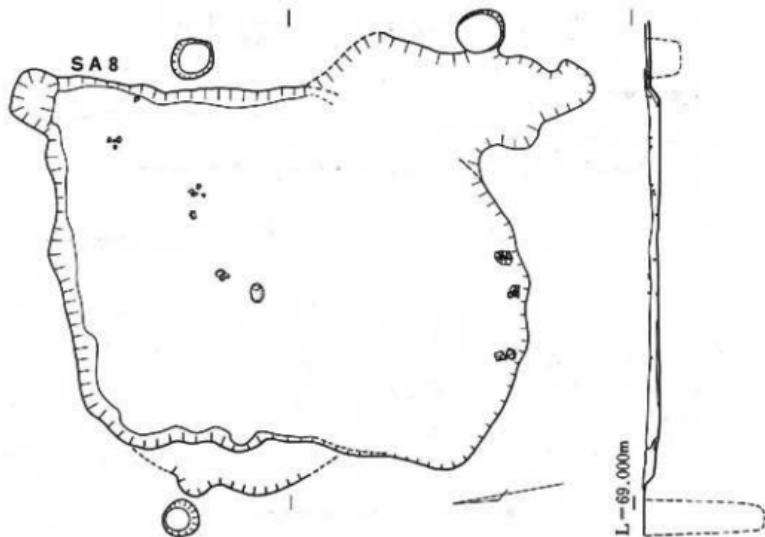
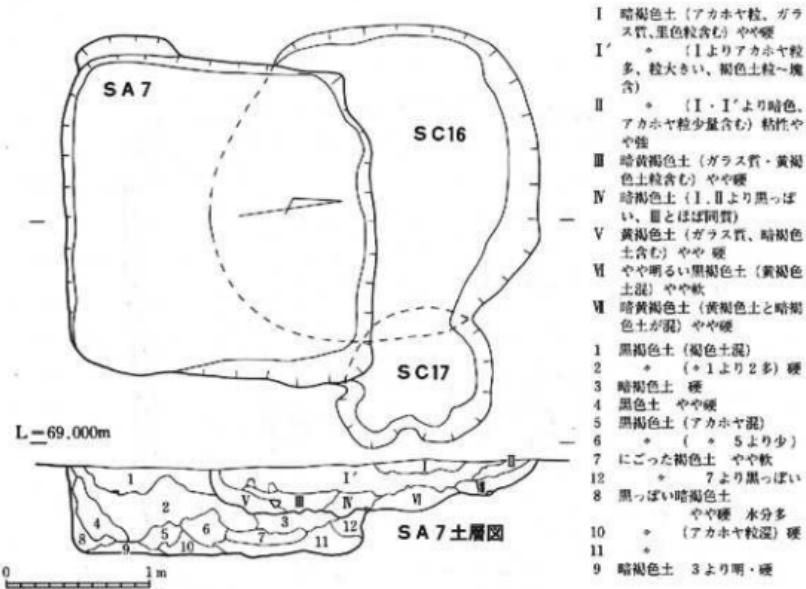
SA 7はSA 1とほぼ同じ規模の方形の竪穴である。埋積後、SC 16・17が切り合い、北壁を掘り込んでいる。柱穴は検出できなかつた。遺物は埋土中より弥生時代の土器と思われる口縁片が出土している。

SA 8 (第36図、図版8)

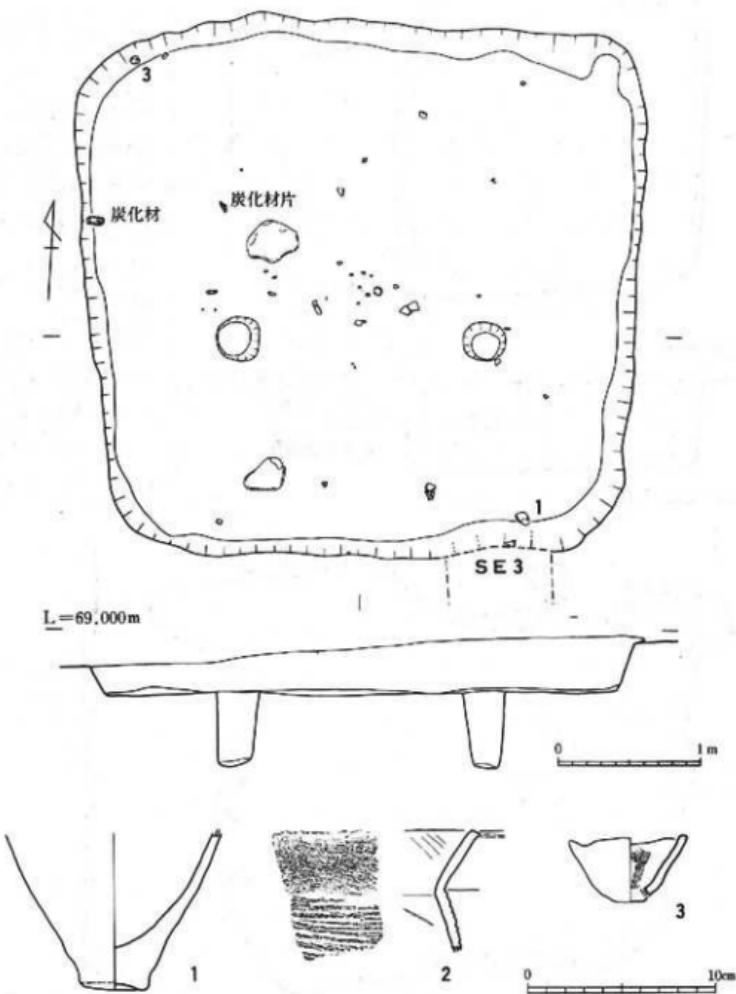
SA 8は不整方形の住居址である。住居の輪郭はかなりいびつで、本来の住居がどのような形であったかは不明である。浅い埋土は黑色土～黒褐色土。壁面はわずかに残る程度で、柱穴は検出されなかつた。遺構に接して検出されたピットは、この住居に伴う可能性があるので実測図に加えた。遺物は検出面から床面にかけて、鉢？口縁片、ミニチュア甕？深鉢？片、甕片、壺片、楕円形の石(しばしば磨石に利用される石材の石だが磨面がない)などが出土している。



第35図 S A 6 造構・遺物実測図



第36図 SA 7・8 実測図



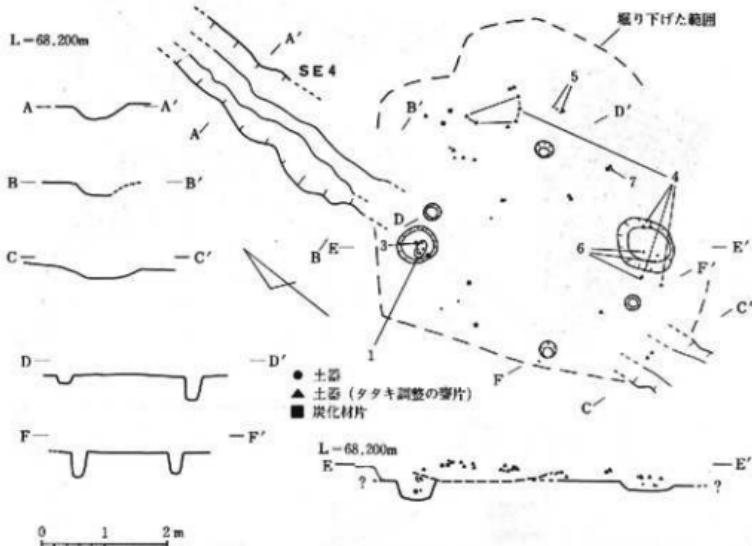
第37図 S A 9 遺構・遺物実測図

SA 9 (第37図、図版 8・18)

SA 9は住居址の中では最も残存状態がよく、主柱穴2本も容易に検出できた。埋土は上層が黒色土、下層が黒褐色土で、ともに炭化材片を多く含んでいた。南壁の東側の一部はSE 3によって切られている。遺物は埋土下部から床面にかけて出土しており、叩き調整の甕(2.この他破片多數・内面ナデ、板状工具の痕跡有り、叩きの際の當て板か?口唇部ナデ)、小型甕の底部(1.全面ナデ調整、内面黒色)、ミニチュアの鉢(3.猪口?外面部ナデ、内面ハケ調整、全面濃灰色)甕片などがある。床面には扁平な河原石が2個置かれていたが、南側のものは上面が平滑になっており、石皿のような用途に利用されていたらしい。北側のものは台石であろう。

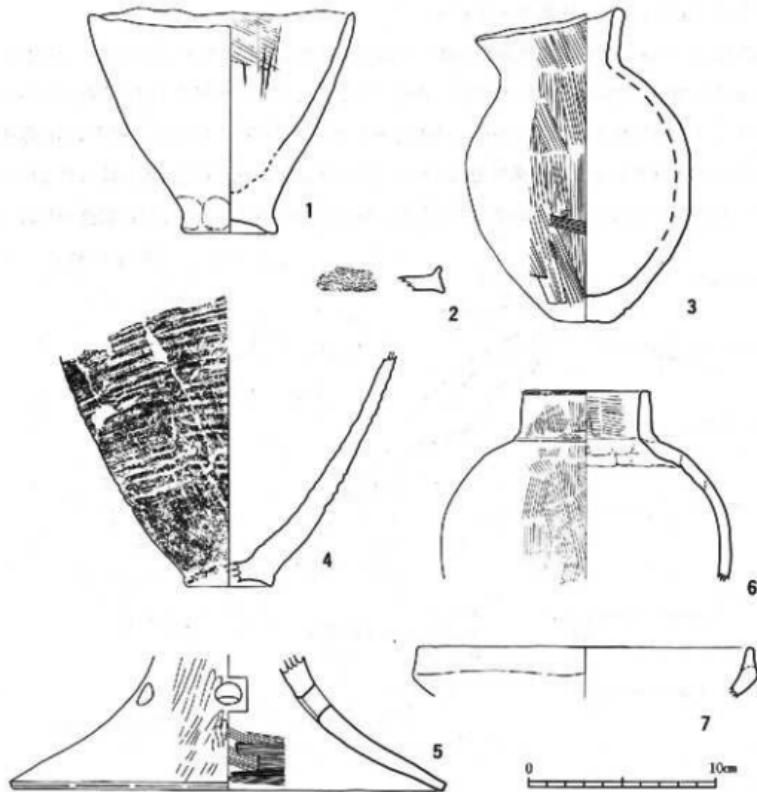
SA 10 (第38・39図、図版 8・16・18)

SA 10は、住居の集中する区域から離れて最も南にある住居址である。黒色土の拡がりと土器片の散乱が認められたため調査したが、もともと黒色土が明確な輪郭をみせていなかったことと、黒色土下の埋土が周囲の褐色土とよく似ていることから、住居の形を確認することができなかった。遺構は後にSE 4に切られているが、床面は削り取られてはいない。柱穴らしいピットが4本検出されたが、住居の形が不明なため主柱の位置や数につ



第38図 SA 10遺構実測図

いては断定できない。その他、径の広いピットが2基検出されており、西側のピットでは完形の小型の壺（3.外面主として縦ハケ、内面ナデ。黒斑有り）と鉢（1.脚部付近黒変、外面および口縁内部にスス付着。調整は外面ナデ、内面斜めナデ、ハケ端部圧痕残る）、炭化材片が出土している。遺物はこの他、遺構検出レベルから床面にかけて土器片が多数出土しており、叩き調整の甕（4.外面スス付着。内面風化のため調整不明）、直立する口縁を持つ壺（6.外面縦ハケ、内面口縁部横ハケ、胴部ナデ）、透かし孔のある高環脚部（5.外面縦磨き、内面ナデ・横ハケ、縁縁辺部ヨコナデ、全体に灰色）、波状文様のある器台？片（2.上面中心方向磨き、他は横ナデ）、ミニチュア土器口縁部、高環片、壺片、甕片などがある。7は遺構検出面で出土したものであるが、類例がなく胎土も他の弥生時代の上



第39図 SA10遺物実測図

器と異なるので、この住居に伴うものか判断しかねる。

SA 10の西の、谷に落ち始める斜面部分では、表土中から4・6と同一個体と思われる壺片や叩き調整の壺片多数が出土している。重機によりSA 10上部から移動した遺物と思われる。ただし、両者で接合したものはない。

SA 11(第40図)

SA 11は方形の住居址で、柱穴は検出できなかった。床面北東部中央寄りには焼土が堆積しており、その上には炭化材片が検出されている。焼土は住居西隅にも見られた。遺物はわずかで、高環壺部片1と器種不明の弥生土器片2が焼土上と北西壁際の床面近くで出土した。いずれも実測不可。

SA 12・SC 1・10・11(第41・42・43図、図版8・9・18、土塙は表1参照)

SA 12はSA 2と同様に壁面が残存しておらず、床面のみの調査であった。表土除去時には、A・B区境界のベルト東端部の南面に接して、住居の南半らしい土器片の散在する三角形の渾った面が検出されていた。ベルト南壁に住居の壁の残存を期待したが全面表土で、すでに掘削を受けていた。ベルトを壊し精査したところ、焼土が現れたうえに住居の埋土がほとんど残存していない(小トレンチにて確認)ので、検出面がほぼ床面に相当すると判断された。床面は、アカホヤ層最下部の粗く固いブロックが層をなして拡がっている面にある。床面の範囲は、南半では不明瞭ながら大まかに分かるのに対し、北半は肉眼では確認できなかった。

遺物は、南半床面とベルトの表土最下部(床面直上)から土器片が多数出土している。接合・図化できたものには高環壺部(1.全面ナデ)、鉢(4.全面ナデ)、脚台付碗(2.外面ハケ・下半はナデ、内面ハケ)、SC 10の土器片と接合した。鉢(3.後述)がある。後述のSC 11の南では土色の違う部分が見られたため試掘したが、この際に床面から10cm下のレベルで高環片が出土している。床面が損なわれた際に落ち込んだものかもしれない。

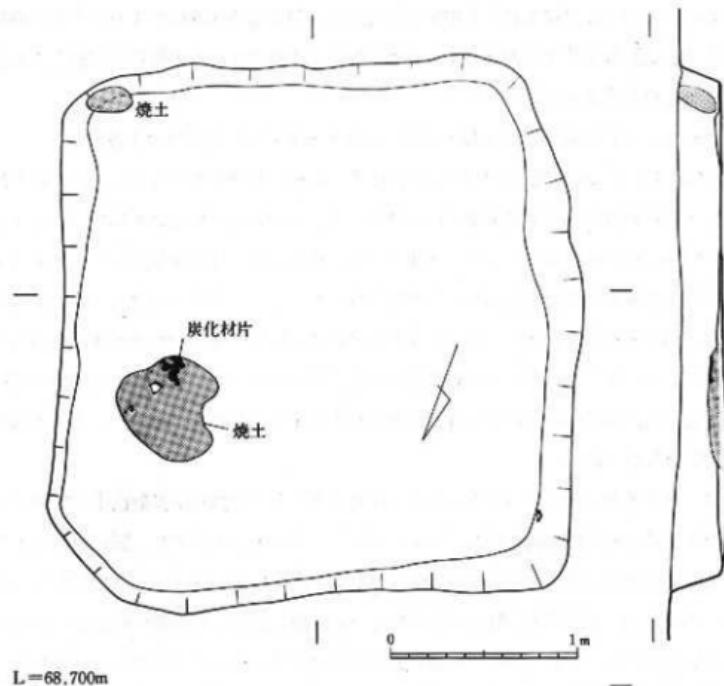
付近には3基の土塙SC 1・10・11が検出されているが、それぞれSA 12との関連を考えられるので、ここで併せて報告する。

SC 1はSA 12南半検出前に調査しており、円形の土塙上面に土器片が散乱して検出された。埋土は上層が黒褐色土、下層が暗褐色土である。上面はSA 12床面とほぼ同レベルで、両者の土器に同一個体と思われるものがあるため、SA 12の床面範囲は、SC 1まで含んでいると推定される。ただし、土塙内に土器の落ち込みが見られず、遺物が全く出土していないので、土塙自体はSA 12に伴うと断定できない。SC 1では壺と思われる底部

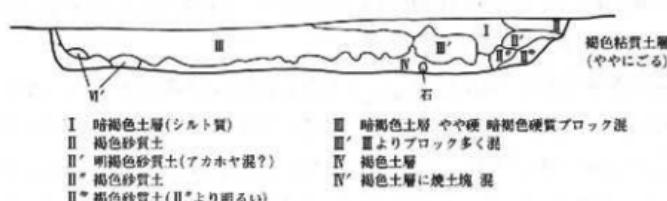
(5.全面ナデ調整。底部縁辺は未成形) 壺片等が出土している。

SC 10

SC 10はSC 1の1.5m南西にある不整円形の土壙で、内部より、櫛描き波状文のある複合口縁壺口縁部（6.口唇部ナデ、他は風化のため調整不明）などの土器片が出土し、一部はSA 12床面出土の鉢と接合した（3.外面ハケ、下部ハケ側縁の圧痕残る。内面斜めハケ・下部ナデ）。



L=68.700m



第40図 SA 11実測図

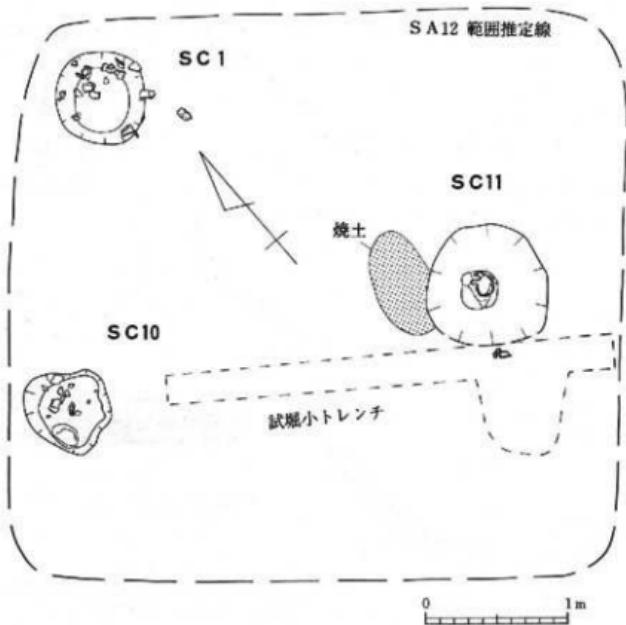
SC 11

SC 11は焼土に接して東側に掘られた土塙である。輪郭ははっきりしていなかったが、床面のアカホヤブロック層中、この部分だけブロックが疎で、砂質の茶褐色土が間に見られたため掘り下げる。内部から直立した口縁を持つ壺の上半（外面スス付着。胴部ハケ、口縁部および胴部内面ナデ）が出土した。焼土との境界は不明瞭で、土塙が焼上面を切っているか否かは判断できなかった。SA 12に伴う可能性があるが、決定できない。

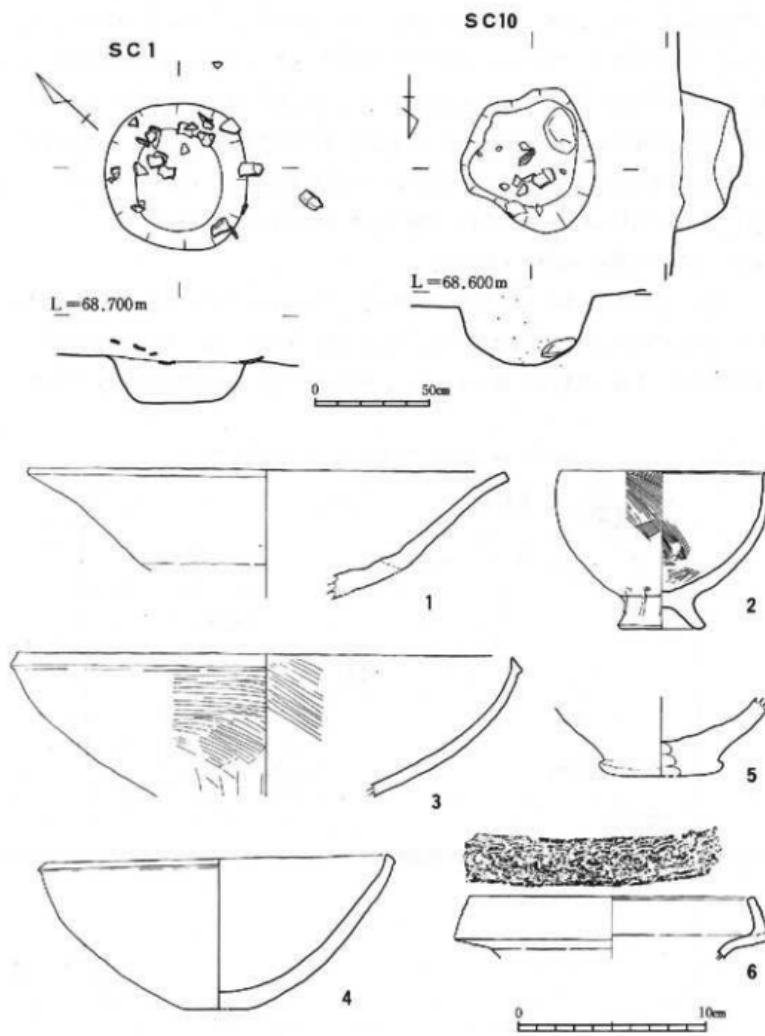
以上の所見により、SA 12はSC 1・10を含めた方形の住居と推定した。

SA 13（第44～48図、図版9・17・18）

SA 13は、やや複雑な形をした遺構で、壁面や柱穴が検出されていないが住居址と推定される。この住居では、多くの土器が廃棄された状態で出土しており良好な一括資料として注目される。土器の種類は、甕（1～10）、叩き調整の甕（11・12）、高环（23～25）、

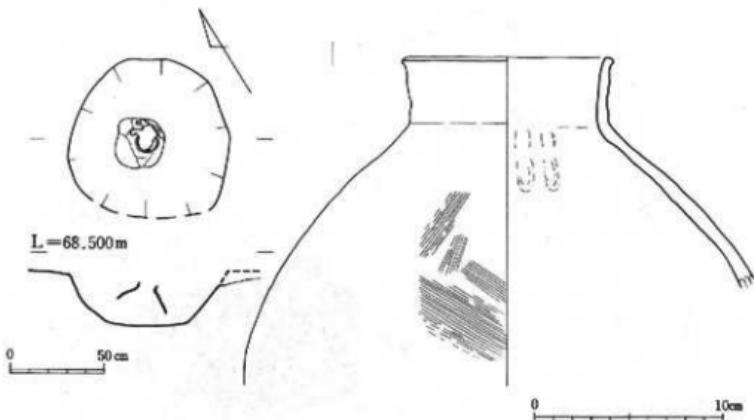


第41図 SA 12 推定範囲およびSC 1・10・11位置図



5はSC 1、6はSC 10出土、3はSA 12・SC 10が接合。他はSA 12(推定範囲内)出土

第42図 SC 1・10遺構・遺物およびSA 12遺物実測図

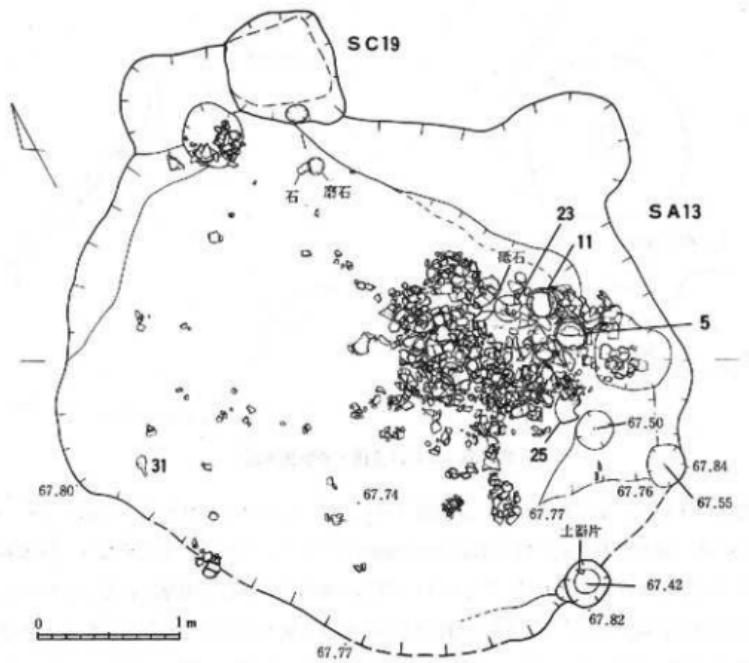


第43図 SC11遺構・遺物実測図

器台（26・27）、壺（13～17）、長頸壺（17）、鉢（28～30）、柄杓形土製品（31）、などがある。壺は、基本的に内外面をハケで調整しており、ハケの上をナデたり、口縁部のみナデているものもみられる。壺13・14、鉢29・30も壺と同様の調整である。いずれも口唇部を平らに成形している。12は底部付近のみ叩きを施している点が注目される。8は口縁部が内湾する壺である。小型の壺類（15～17）・高坏・器台・鉢28は外面を丁寧に磨き、内面（隠れる部分）をナデやハケで調整するのが基本となっている。SA 13出土土器は、赤変しているものや器面が剥離しているものが多く、強い2次的な火を受けているのではないかと思われる。また、出土した多量の土器片には、接合が可能で掲載できたもの以外に接合の機会を持つものがあり、廃棄された個体数はさらに増すであろう。土器の他、砥石と、住居北西部で両端に抉りを持つ方形の磨製石包丁が出土したが、石包丁は不幸にも盗難に遭った。これはSA 2出土のものとよく似ており、やや小型であった。

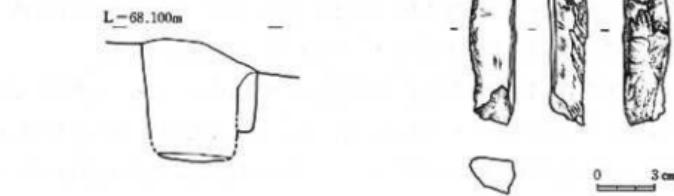
埋土は上層が黒色土、下層が黒褐色土で、炭化材片を多く含んでいる。北西端には方形の土塙SC19（表3）があるが、その埋土はSA 13と同じく炭化材片を多く混じる黒色土で、炭化材片はやや大きい。用途は不明であるが、SA 13検出時に輪郭は現れておらず、SA 13と同時期に使用された可能性もある。

SA 13南東隅のピットでは、底面から弥生土器片が、上面から土師器片と青磁片が、それぞれ一点ずつ出土している。SA 13に伴う可能性も考えられる。

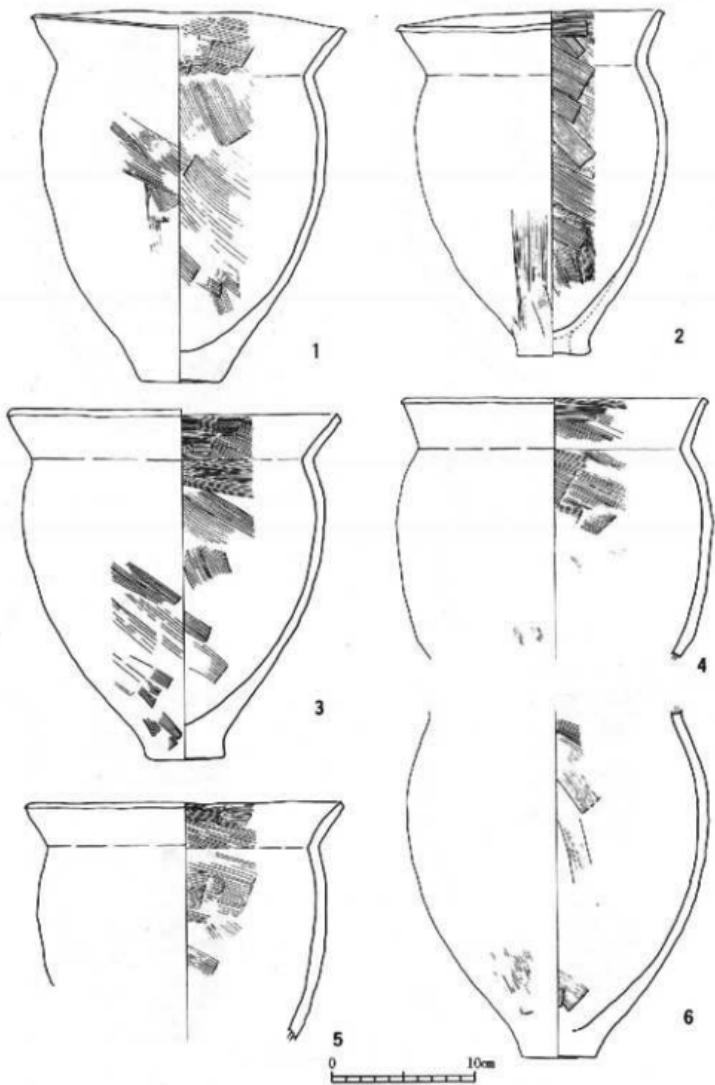


※造構に付した数字はレベルを表わす

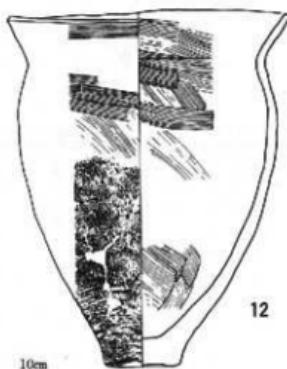
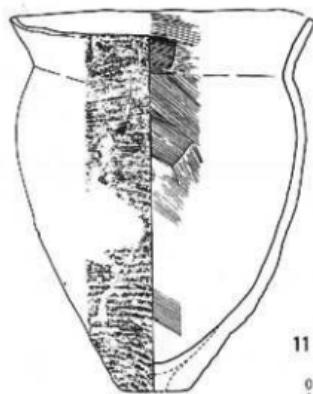
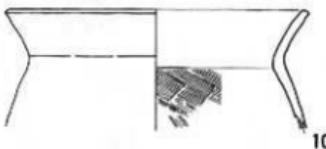
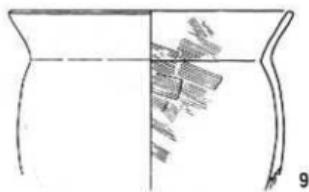
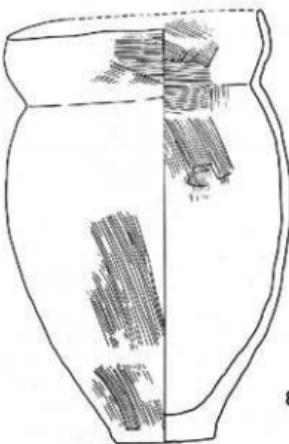
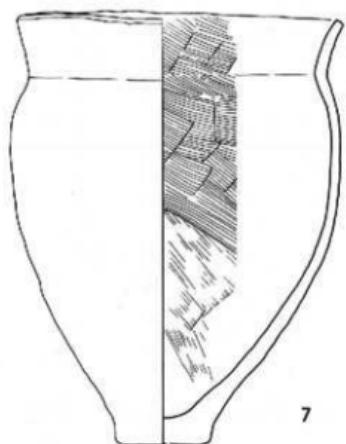
SC19断面図



第44図 SA13・SC19・SA13出土砾石実測図

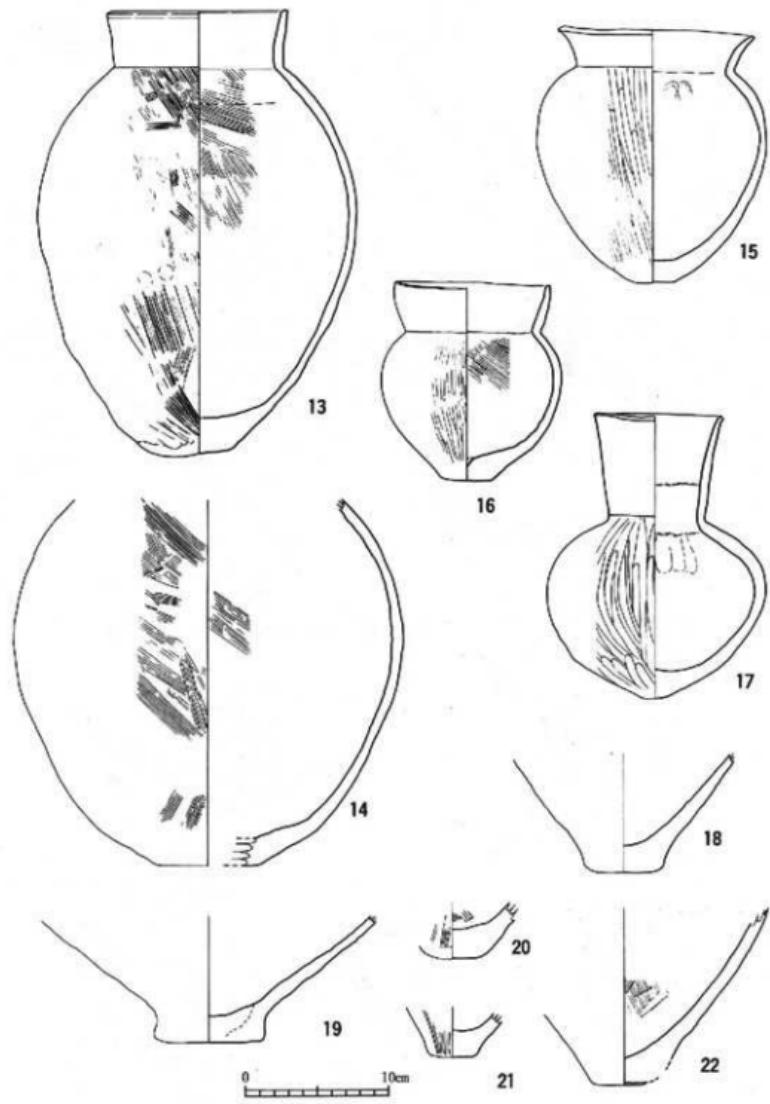


第45図 SA 13遺物実測図 (1)

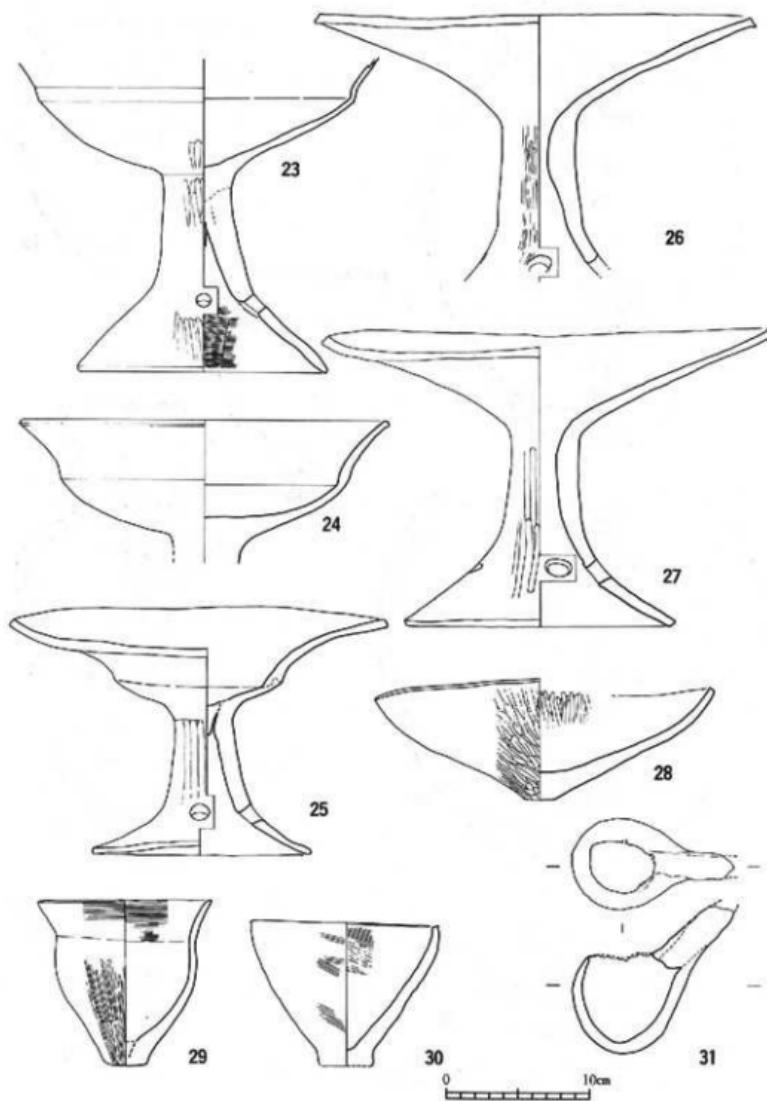


0 10cm

第46図 SA13遺物実測図(2)



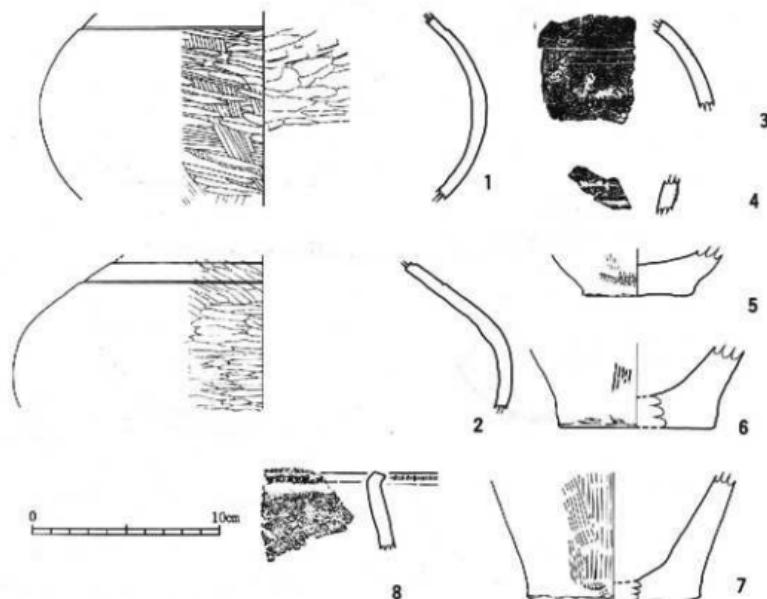
第47図 SA 13遺物実測図 (3)



第48図 SA13遺物実測図(4)

3. 遺構外出土の遺物

弥生時代の遺物は、遺構外では表土中から土器片多数が出土しており、そのほとんどは住居址群に関連すると思われる。C区では、SC 12・13・14と同時期の土器が出土している（第49図）。1・2は壺の胴部上半である。最上部に2条（1は1条のみか2条か不明）の沈線を持つ。内外面とも丁寧に磨かれており、1では磨きの前にハケ目で調整しており、内面に板状工具の圧痕が残る。これらは外反する口縁とハの字形に開く頸部を持つ壺の一部と考えられる。3も壺の胴部上半の一部であるが、ヘラ描きの沈線を持つ。4は器種不明（高坏の一部か）のよく磨かれた土器片で、貼り付けた偏平な粘土帯にヘラで短沈線を連續施文している。5は壺底部で、1と同じく縦ハケの後磨いている。6・7は下城式壺の底部。6はSC 14付近で出土した。8は壺または壺の口縁部とみられ、突堤状の口唇部外縁に刻み目を施している。



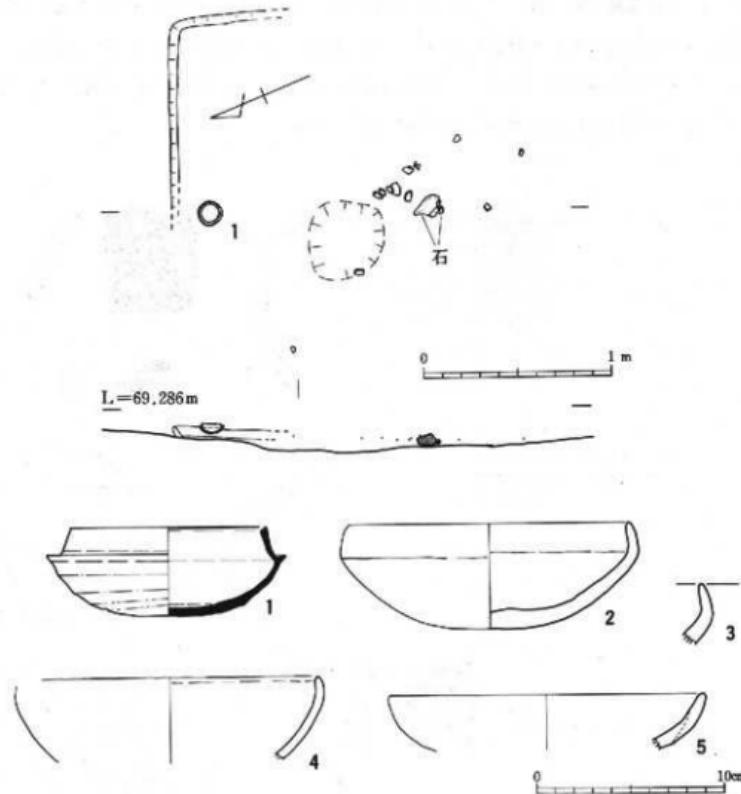
第49図 遺構外出土弥生土器実測図

第3節 古墳時代の遺構と遺物

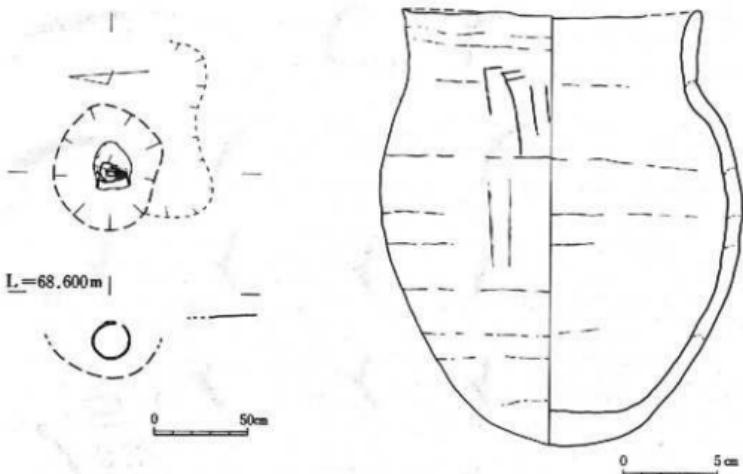
古墳時代における人々の生活の場は、主に谷を隔てた西の丘陵上（E区、II. 調査の概要参照）にあったようだ。今回報告する東側の丘陵上では、遺構は住居址1軒（SA 5）と土塙1基（SC 9）が検出されているだけである。溝状遺構の埋土や表土中では須恵器・土師器などの遺物が出土している。

1. 住居址および土塙

SA 5（第50図、図版16）



第50図 SA 5 遺構・遺物実測図

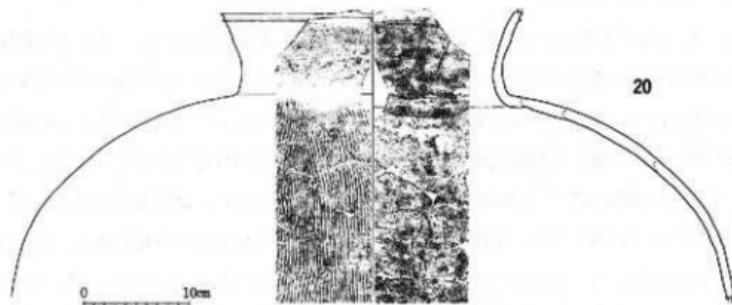
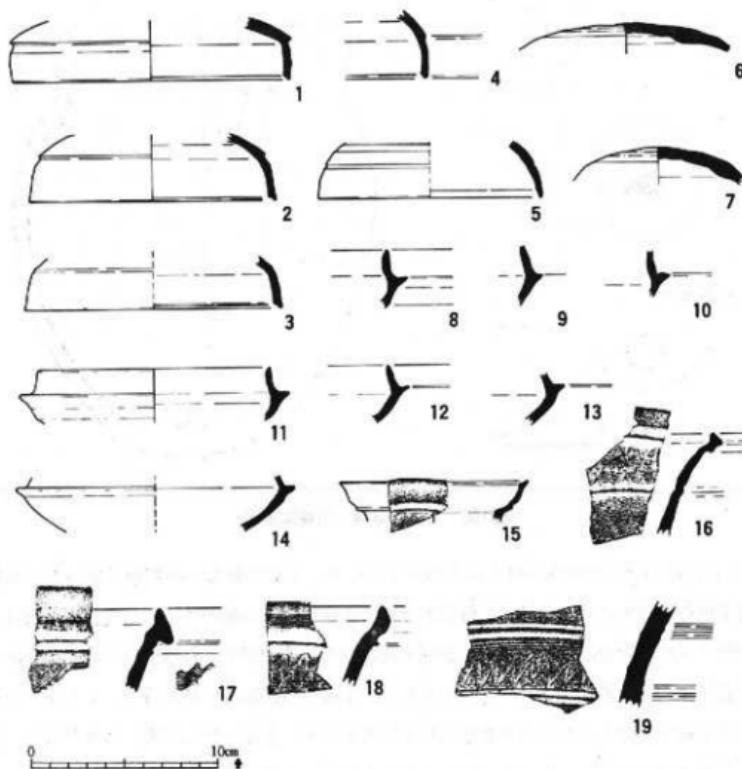


第51図 SC 9 造構・遺物実測図

SA 5 は削平のため壁面がほとんど残っておらず、遺構の輪郭も不明瞭であった。住居の北東隅のみ検出できたが柱穴が確認できず、正確な住居の範囲は不明である。遺物は、北壁際に完形の須恵器の壊身（1）が据え置かれた状態で出土したのをはじめ、床面から土師器壊4個体の破片が（2～5）出土した。1は口唇部に浅い溝を持ち、立ち上がり部が直立気味な点は古い型式の特徴を残しているものの、全体に作りが粗い印象があり、胎土も精選されていない。体部はケズリによる成形で、ロクロは逆時計回りである。

SC 9（第51図、図版10）

SC 9 はアカホヤ除去の際に土器が現れ、はじめて存在が確認された。アカホヤ面検出時に肉眼で輪郭が確認できなかったところへ、その後上面にアカホヤが流入して被覆していたためである。埋土はアカホヤ粒と濁った褐色土が混じており、周囲の土（2次堆積？アカホヤ～褐色土層）と判別が困難であった。土壇の形状は推定によるものである。出土した土器は土師器の壊で、口縁の一部を欠くがほぼ完形である。破断面にはわずかながら赤色顔料の付着が観察され、廃棄に際しての呪術的な行為によると想像される。調整は胴部では板状工具による強い綻ナデ。外面には全体にススが、内面底部には炊飯時のコゲ付きがみられる。丸底で口唇部を成形せず、粘土紐の接ぎ目を丁寧に処理していないことから、時期は後期後半と考えられる。同時期のE区の住居址群に関連する遺物であろう。



第52図 表土出土須恵器実測図

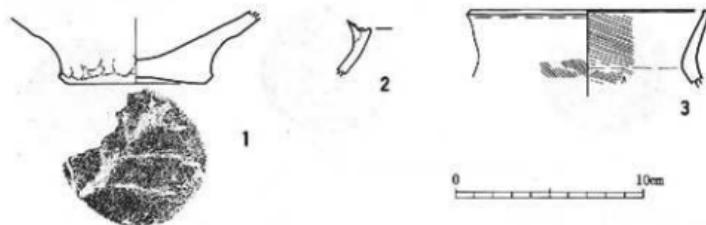
2 遺構外出土の遺物

(1) 須恵器 (第52図)

須恵器はA～C区の表土より出土しているが、とくにB区の東部では多く出土している。器種には壺身・蓋(1～14)、翫(15)、長頸壺(16)、甕(17～19)、などがあらわれる。壺蓋には稜の鋭いもの(1・2)、鈍いもの(4・3)、全くみられないもの(5)があり、この順に口唇部の溝も浅くなっていく。壺身は、立ち上がり部が上方に向かうもの(8・10・11)と内側に傾斜するもの(9・12・13・14)がある。16は出土須恵器中最も古様を示し、口唇部両側縁が鋭く、全体にオリーブ色の自然釉がかかる。時期は5世紀末～6世紀初頭と思われる。20の大甕は同一個体の多くの破片のうち接合できた一部分で、外面平行線叩き目、内面はナデて平滑にしている。胎土が近似することから18がこの口縁部になると推定される。大甕は、この他に数個体の胴部破片が約40点出土しており、内面をナデているものと当て具痕(同心円)を残すものとがある。

(2) 土師器 (第53図)

古墳時代と断定できる土師破片は少ない。1は底面に木の葉の圧痕のある壺または甕の底部である。調整は全面ナデ。外面は部分的にススが付着している。2は須恵器を模倣した壺である。3は凹部のくっきりしたハケ目痕を持つ甕の口縁部とみられ、胎土は精良、よく焼き締まっている。この他、SA5出土の壺類とよく似た破片も出土している。



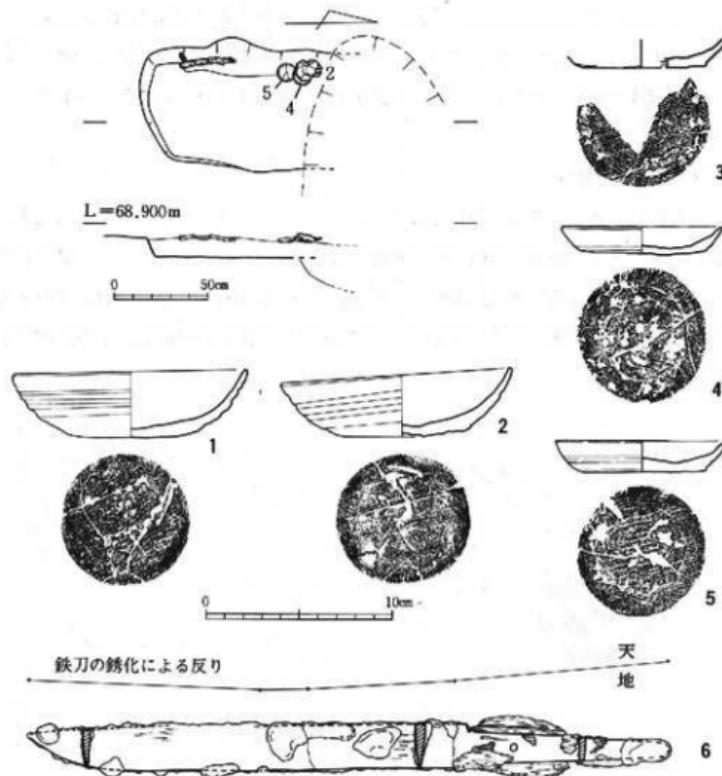
第53図 表土出土 土師器実測図

第4節 平安時代の遺構と遺物

平安時代の遺構は、土塙墓が1基（SD I）検出されている。また、当時代として処理しかねるが併記すべきものに、ヘラ切り底の土師皿片を出土したピット（P 1～3、第7図）がある。P 1は近位置に3つのピットがあるが、これらが方形に並び、ピット底面レベルが近似することから住居の柱穴である可能性も考えられる。

SD I (第54図)

SD Iは床面から10cmほどの土塙下部しか残らず、北半を搅乱によって失っている。検出面が遺物出土面で、刃先を北に向けて置かれた現存長34.5cmの鉄刀（木質残存、両闘。鋸化のため反り曲がっている）土師皿3（3～5）、土師壺2（1・2）が出土している。



第54図 SD I 遺構・遺物実測図

土師器はヘラ切り底で板目の圧痕が残る。1・3は検出作業時に移動し、正確な原位置は不明であるが、他の土師器の上に重なっていたとみられる。

第5節 時期不明の遺構と遺物

1. 溝状遺構（第7図、図版7）

溝状遺構は6本（SE 1～6）検出されている。溝の全容が分かるのはSE 1のみで、丘陵基部を東西に切るように掘られており、両端はそれぞれ斜面に落ちている。最大幅72cm、最深39cm、全長50.2mで断面U字形～台形。上部は削平のため不明だが、排水や区画などの用途が考えられる。SA 4を切ることから時期はSA 4（弥生後期後半）以降で、埋土より須恵器壺片2と土師皿片2が出土している。この他の溝状遺構は南北方向に掘られており、両端が途切れる。SE 2は最大幅80cm、最深20cm、全長12.64mで、断面は丸みのある台形。遺構は溝の最下部にあたり、ここで弥生時代後期の土器（叩き目のある壺片1を含む）が数点出土しているので、同時期の住居址群と関連する可能性が大である。SE 3は最大幅78cm、最深25cm、全長7.62mで、断面は逆かまぼこ形。SA 9を切っており、遺物は底面より須恵器壺片1が出土している。SE 4～6は調査期間終盤期の褐色土層の集躰群検出時に発見されたので掘り下げて調査することができなかった。これらはいずれも溝の埋土によく見られる黒褐色土を埋土に持たず、周囲の土とよく似た土であったため遺構精査時に検出されず、集躰群内の空白部分が遺構発見の手掛かりになった。SE 4はSA 10を切っており（第38図）、南端部のみSA 10調査時に掘り下げることができた。埋土より須恵器大壺片や坏片が出土している。最大幅110cm、最深22cm。SE 4・5間に細い溝が東西に連結しているが、両者は同時期のものと考えられる。SE 5・6は繋がるものか否かは中間部が不明瞭なので決定しがたい。SE 5の最大幅は110cm、SE 6の最大幅4.3mで、C-1トレンチに現れたSE 6の断面は横に開くV字形で、最深は約65cmであった。埋土は数層に別れ、堆積の様子から自然堆積と思われた。

2. 土塙（第55図、図版10）

時期不明の土塙は10基検出されている。各土塙の概略は表3に示した。土塙はA区とB区最北部の平坦面、つまり、住居のある面に集中しており、例外はSC 18・19の2基のみである。SC 18は規模がSC 13・14と近似し、同様に下城式の壺片が出土しているが、同時期と決定する根拠に乏しい。SC 19はSA 13の北西に掘られており、

多量の炭化材片や角礫が集積しているなど、特異な性格の遺構である。SC 3 は、食用の貝類を廃棄した土塙として注目される。その内容は現在われわれが口にするものとほとんど変わらないが、海に近い立地の利をそのまま表しているようで興味深い。

3. 配石遺構（第57図、図版10）

A区最南部中央では用途不明の配石遺構が一基検出されている。

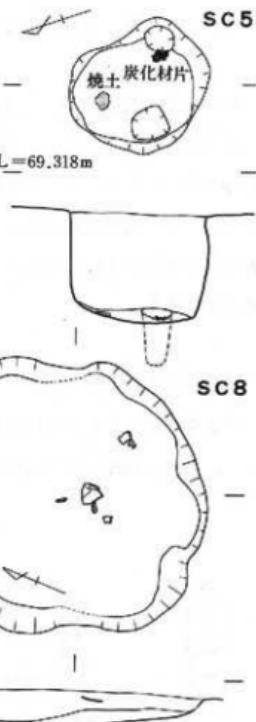
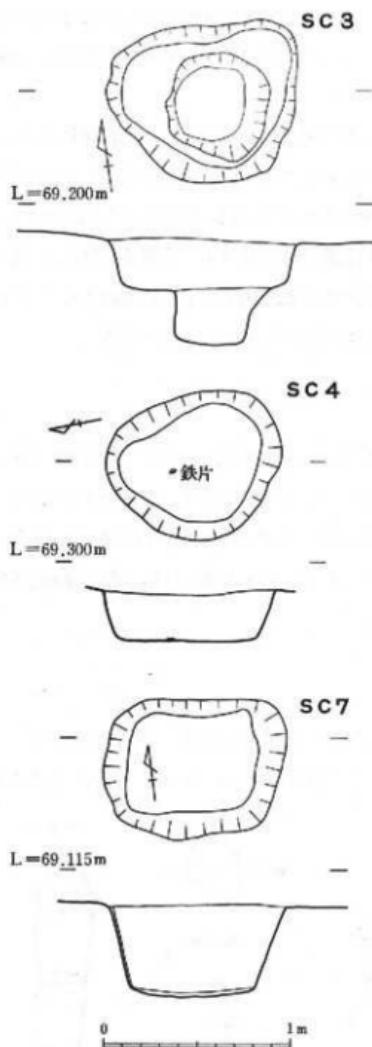
表土除去のさいに白色粘土の括がりと並んだ河原石の頭部が現れ、当初「古墳の石室か」とも思われたが、石を覆う土を除去すると、図57のように長方形に敷き詰められた河原石が検出された。河原石は径10~30センチほどの扁平なものを選んでおり、東辺を除く三辺では数個、平らな面を内側にして垂直に立てて並べている。上部と東辺は後世の削平をうけており、原形は四辺とも垂直にたてられた河原石に閉まれる形であったと推定される。これら側石は丸い小口が上部になるので、この上にさらに石が積み重なる形であったとは考えにくい。

表3 時期不明土塙一覧表

土 塙 番 号	平面形	規 模	出 土 遺 物	備 考
		長軸×短軸×深さ (m)		
SC 2	不 整 方 形	1.50 × 1.50 × 0.44	—	
SC 3	不 整 円 形	1.00 × 0.83 × 0.56	食用の貝類 (主としてシジミ) 11.98kg	貝種は表4参照 図版10
SC 4	椭円形	0.92 × 0.80 × 0.28	鉄片 1	鉄片は第56図に実測 図掲載
SC 5	円 形	0.77 × 0.62 × 0.58	底面に炭化材片 埋土にも混じる	土塙内にピット 2 焼土有
SC 7	方 形	0.95 × 0.71 × 0.48	—	
SC 8	不 整 円 形	1.70 × 1.45 × 0.20	縄文時代(中期?)の土器 片 2 流入の可能性有	
SC 16	円 形	2.40 × 2.30 × 0.35	果実種子 16 炭化材片 1	
SC 17	円 形	1.15 × 0.95 × 0.12	—	
SC 18	円 形	3.00 × 2.32 × 0.71	弥生下城式甕片 2 流入か	F区斜面の土塙 東半のみ振り下げ
SC 19	方 形	0.75 × 0.75 × 0.83	炭化材片 多量	角礫が集積して いた。図版10

表4 SC 3出土貝類一覧表

貝種および個体数	生息場所
クロアワビ 1、サザエ(内湾性) 1、(サザエのフタ) 6、ウニ 17、ハマグリ 21	(咸水)
クボガイ 38+α、ヘソアキクボガイ 3、ヒメクボガイ 3	海岸近くの岩(咸水)
イシダラミガイ 13、イボニシ 4、レイシガイ 3	干潮時に干上(咸水)がる所
コシダカガンガラ 34+α	干潮時に少し水の残る所
フトヘナタリ 15+α	入江、河口の(咸水)泥の中
タケノコカワニナ 16、イシマキガイ 4	河口(汽水)
ヤマトシジミ (11.50 kg)	河口(汽水)



第55図 SC 3・4・5・7・8実測図

敷石は上下二重に配されているが、その上部・下部・配石間のいずれにも遺物は発見されなかった。ただ、少量の炭化物が検出されたことは、石の露出していた部分が赤変したり黒ずんだりしていることとあわせて、ここで火を使ったなんらかの行為が行われたことを示唆している。

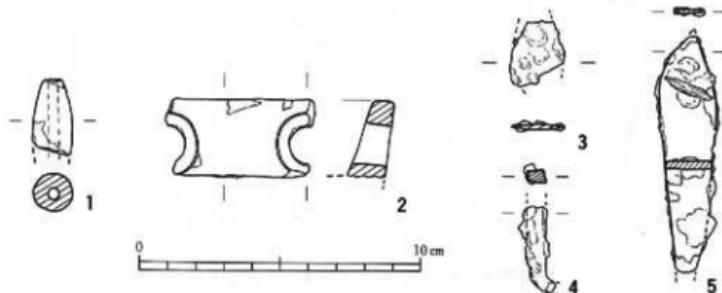
南側には、配石に接して方形の白色粘土の拡がりが確認された。この白色粘土は、粘土底面と配石下の土塙底面がほぼ同じレベルにあることから、土塙に配石した後の余った空間に充填する作業が、配石上に白色粘土を被覆する段階に同時に実行されたのか、前後するのかどうかは不明である。また、白色粘土中には多量の炭化物と焼粘土が混じており、さらに火の使用を裏付けている。ただし、配石内の火の使用時のものか否かについては判断する材料がないので、この点は留意しておくべきであろう。

4. 性格不明の遺構 SZ I (第57図下)

SE I 埋土上に載る形で灰色粘土と焼粘土の広がりが東西長1.73m、南北幅0.33mの範囲で検出されている。粘土の厚みは最も厚いところで4cm程度。炭化材片も散在しており、ここで火が使用されたことをうかがわせる。当然ながら時期はSE I埋積後で、長方形の土塙の底面に相当する可能性も考えられる。粘土と火の使用は配石遺構との関連を連想する。

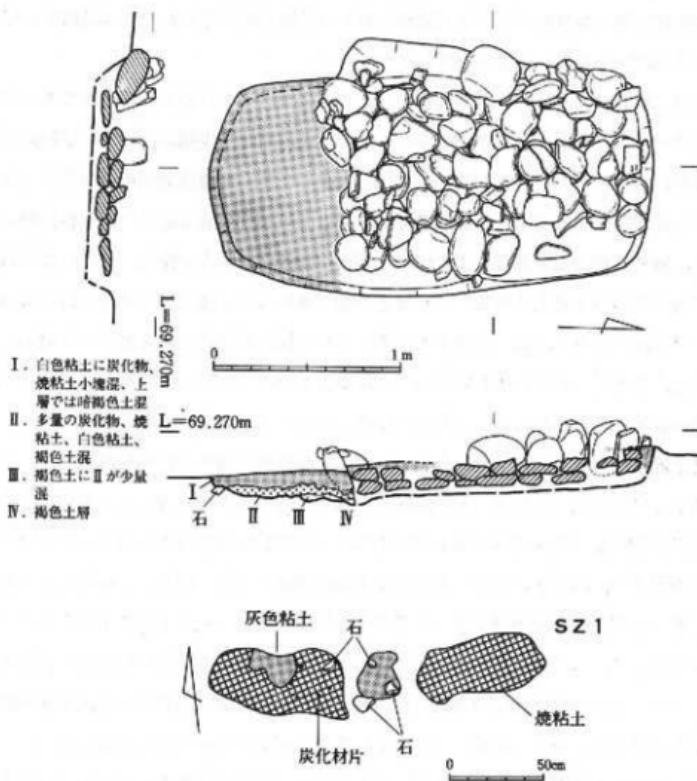
5. 遺構外出土の遺物

時期を決定できない遺物は第56図掲載の土錘(1)、盤？口縁部(2)、不明鉄片(3～5)の他、器種不明の土師器片、陶磁器片などがある。1は現存長2.65cm、径1.4cm、



第56図 時期不明遺物実測図

口径3.5mm。2は類例がないので本来どのような形であったか不明。やや鈍い色だが、丹塗りの痕跡が観察される。4は釘などの金具であると思われる。5は現存長8.35cm、厚さ2.5mmで下端は欠損しているかここで完結か不明。鍔身に似るが上部は刃部を造り出していない。



第57図 配石遺構およびSZ 1実測図

IV まとめ

大戸ノ口第2遺跡の調査では、縄文時代早期から平安時代にかけての遺構・遺物が検出され、じつに1万年近くの歴史の流れの中で点々と残されてきた生の足跡を見ることができた。以下、各時代について簡単ながらまとめを述べる。

縄文時代早期の散礫群中では集石遺構と多くの遺物が検出されたが、本遺跡では県内の他の早期の遺跡と比較して若干気になる点がある。

それは、夥しい礫の検出された場所が丘陵の尾根上、つまり最も高い場所であって周囲の斜面部分ではないということである。しかも丘陵基部から先端部にいたる広範囲に密集した礫群が層をなして広がる。この事実は、従来の「集石遺構は調理用の施設であり、集中する焼礫群は廃棄による」という単純な考え方では到底理解できない。礫群の礫の石材は尾鈴山酸性岩類が主であり、小丸川に運ばれた礫を河原などで採取、または段丘の礫層の礫を用いていると考えられる。これほど多量の礫をこの丘陵上まで運んだ目的は何であろう。平坦面つまり生活面に相当すると考えられる面に意図的に礫を置くのは何故であろう。また、赤変し、割れた礫が物語る火の使用はどのような時に行われたのであろう。本遺跡の礫群は、われわれに新たな視点の見直しを迫っているようである。

縄文土器については概略を記したが、近年の宮崎県内の調査では稀な内容であった。

早期では早水台式、田村式、手向山式や円筒形の押型文土器、吉田式や前平式等の貝殻文施文円筒形土器、撚糸文系の塞ノ神式土器などのはか特記すべきものとしてネガティブな横円押型文、高山寺式の出土、また織維土器の確認がある。前期から中期にかけては曾畠式、森式、阿高式など予測できる土器の出土ではなく、船元式系土器を中心とした土器の出土であり、これら早期から土器を通じて近畿・瀬戸内地方との密接な関係を看取することができる。大戸ノ口遺跡は地理的に日向灘に面した海岸部に所在し、北流する黒潮と陸伝いに逆流する潮の流れ（反流）による文化交流の証をみる思いがしてならない。

現在、宮崎県の前期から中期にかけての様相には不明な点が多く、今回の調査によって今後の研究に貴重な資料を得ることができた。阿高式の出土がないことも解明の鍵になるであろう。

弥生時代では、県内で調査例の少ない前期（末）の遺構・遺物と終末期における良好な括資料を出土したSA13が注目される。前期については、下城式の壺、よく磨かれた器面にヘラや竹管状の工具で紋様を描いた瀬戸内系の壺片など小丸川を隔てた北東の台地上に

ある持田中尾遺跡出土の土器と共に通する要素を持つ。丘陵上に住居址群の営まれたのは後期後半から終末にかけての時期で、後期前半の住居址と遺物を検出した西の大戸ノ口第3遺跡に後続するものである。住居址出土土器中、叩き調整のある甕は県内での出自過程や時間幅について不明な点が多く、これら出土資料を詳しく分析することによって「叩き甕」と一括呼称される中に時期や形式の差を引き出すための情報が得られると思われる。SA13出土土器中には、やや内湾する裾部を持つ高壺など後の土師器に見られる特徴を内包しているものが見られる。

古墳時代は後期の土塙1基と中期末～後期初め（出土須恵器の時期）の住居址1軒のみ検出されたが、その評価は、谷を隔てたE区の後期を中心とした住居址群（今回未報告）と合わせて考えるべきであろう。SA5は住居址として処理しているが、出土遺物が环で占められることから居住が目的ではなく、たとえば古墳などを対象とした供獻目的の簡単な建物と捉えることもできる。調査区南東端をはじめとして付近には大戸ノ口古墳群の円墳が点在しており（第2図）、調査区丘陵上にも古墳が存在していた可能性がある。SA5の遺物に加えて表土に残された多数の須恵器片や土師器環類の破片などがかつての存在していた古墳に付随するものと考えられないだろうか。C区東部では、古墳の基底部の可能性が考えられる部分にトレンチを入れたが、手掛かりは得られなかった（第5・7図）。

平安時代の墓制については、発掘例が少ないこともあり不明な点が多い。本遺跡で検出された土塙墓SD1は重要な一資料となる。墓塙と鉄刀が真北に近い方向に配置されていることから、遺体も頭部を北に向け、その右側に环や皿と鞘に納められた鉄刀を副えたと考えられる。時期については、环の形が逆台形ではなく口縁から底部にかけて丸みを帯びた碗に近い形状であること、いまだヘラ切り底であることなどがら平安時代の終末期、おおむね12世紀代に該当すると考えられる。

配石遺構はこれまでに確認例のなかったタイプのものであるが、類似した遺構の調査例が一例あるので報告したい。

注)

愛媛県今治市八町遺跡5調査区1号墳墓は大戸ノ口遺跡のものとよく似た配石状態で、敷石上面で土師皿と瓦器塊が伏せられた状態で出土している。遺物の年代から14世紀頃と考えられている。しかし、報告にこの墳墓の敷石が火熱を受けていたという記載はなく、粘土で被覆されてはいなかったため、大戸ノ口遺跡の配石遺構とは若干異なる性格の遺構であると見られる。本遺跡の配石遺構の用途については、まず第一に墳墓が考えられるが、遺物が全く出土していないことで裏付けを欠いている。第二には火を受けていることから

火葬炉の可能性も考えられる。配石の南側に充填された粘土中には多量の炭化物などが混じているが、この粘土を詳細に観察・分析すればこの可能性を否定あるいは肯定する情報が得られると期待される。

大戸ノ口第2遺跡A～F区では、縄文時代後晩期～弥生時代の初頭・中期、古墳時代前期については人々の生活の残滓が全く見られず、奈良時代以降についても明確な遺構に乏しい。南西の谷では湧水がみられ生活には好適地と思われるが、A～D・F区は丘陵の先端部ということもあってか定着した生活が営まれたのは縄文時代早期と弥生時代後期後半のみであったようだ。古墳時代以降は、残された遺構を見ると「埋葬」や「廃棄」に関わる区域として利用していたと考えられる。

大戸ノ口第2遺跡の調査は、これまで単発的で小規模な調査しか行われていなかった高鍋町内では初めての本格的なものであった。この遺跡が長い時間の中で保存してきた情報をどれだけ汲み取ることができたかと思う時、自戒の念を禁じ得ない。しかしながら、この貴重な複合遺跡の調査によって段丘地帯の片隅の歴史を垣間見ることができたことは幸いであった。

出土遺物の整理作業および資料の分析については不十分な部分もある。今後、より詳しい整理・研究の中でこの遺跡についての新たな情報を明らかにし、公表してゆきたい。

縄文土器を整理する過程では多くの研究者の方々の御教示をいただいたが、何分瀬戸内地方に關する資料の勉強不足から十分に消化することができなかつた。御教示いただいた方々を記してお詫び申し上げたい。

河瀬正利、泉拓良、（以下、縄文研究会）木村幾多郎、島津義昭、田中良之、平岡勝昭、高木正文、木崎康弘、清田純一（敬省略）

また、弥生時代以降の遺物を整理する過程および本書を作成する過程においては下記の方々の御教示・ご協力をいただいた。記して感謝申し上げたい。

横山邦繼、藤丸詔八郎、石川悦雄、長津宗重、永友良典、谷口武範、吉本正典、東憲章、荒木慶子、津賀久美子（敬省略）

注）「八町遺跡の調査の概要」『一般国道196号今治道路埋蔵文化財調査報告書』Ⅱ

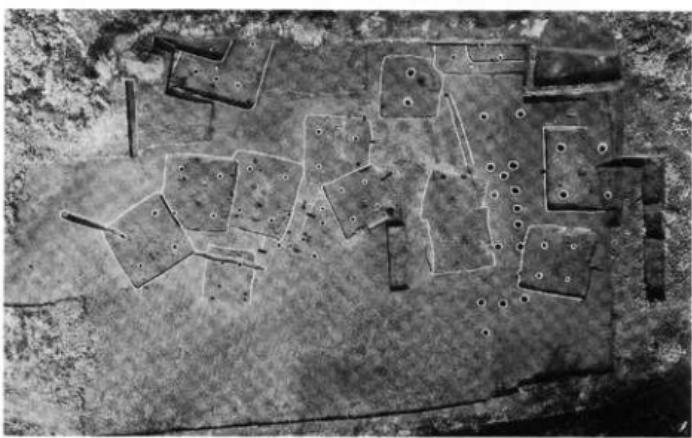
愛媛県埋蔵文化財センター 1989年

圖 版



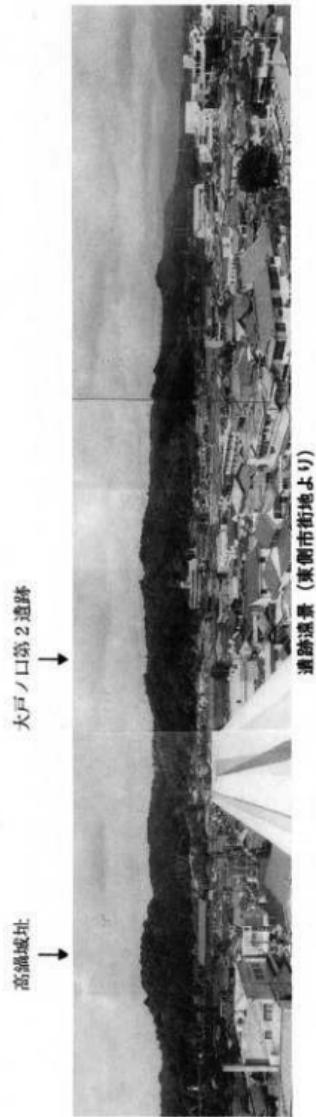
遺跡全景（南東より）

縄文時代早期の櫛群検出時の状況



E区 住居址検出状況

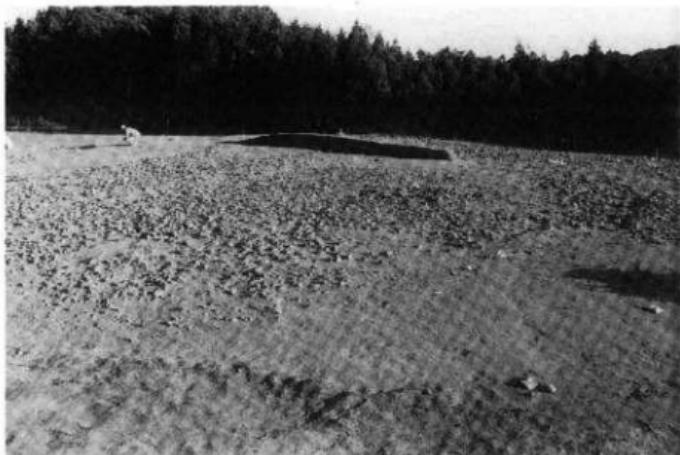
図版2



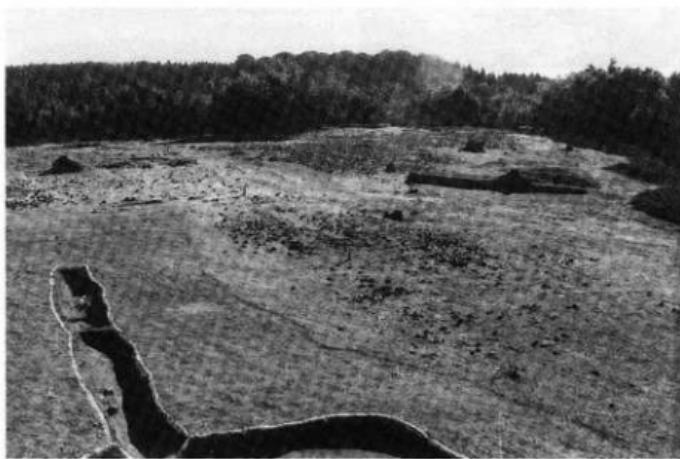
遺跡概景（東側市街地より）



縄文時代早期の爆群検出状況（A区東部 SA2・3付近）



C区 碓群検出状況 (北西より)

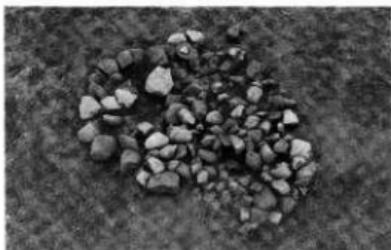


碓群検出状況 (B区西部よりC区を望む)

図版4



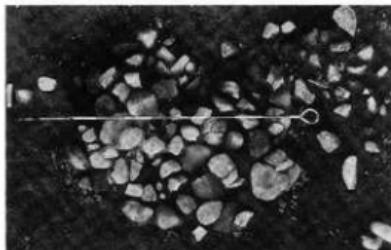
SI 1 断面
SC15南壁に現れている



SI 22



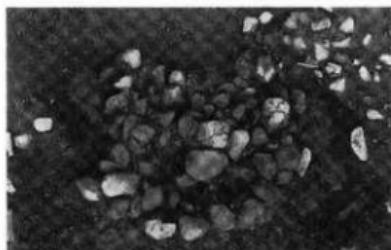
SI 39
下半(西半)はトレンチにより削られている。
中央下部に扁平で比較的大きな石が置かれて
いる。



SI 40



F区東部南東端の礫集積状態



SI 40
上面の礫を取り除いた状態

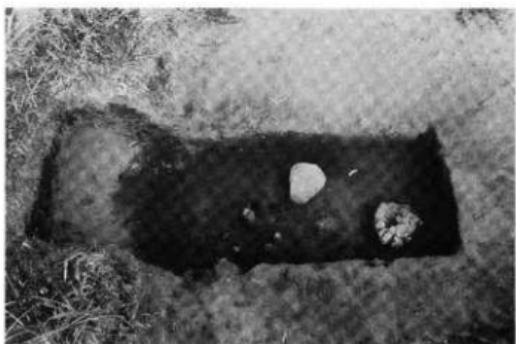
図版5



SI 8
石斧出土状況

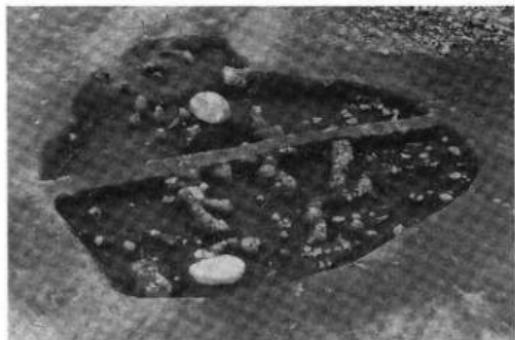


縄文土器53出土状況
左上が53、中央は全面
条痕の上器胴部



SC 6
遺物出土状況

図版6



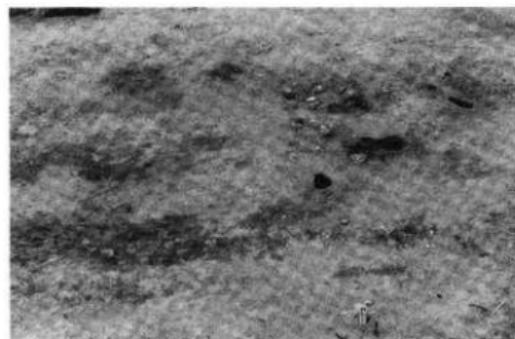
SC12
遺物出土状況

右上に見えるのは
縄文時代早期の櫛群



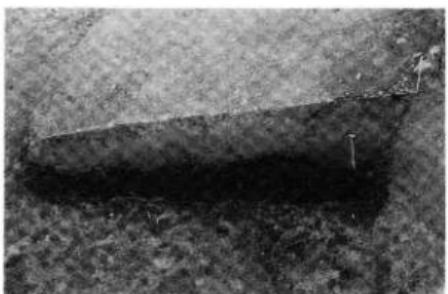
SC14
遺物出土状況
(北から)

造構壁面にアカホヤ
下歯群の歯が見える

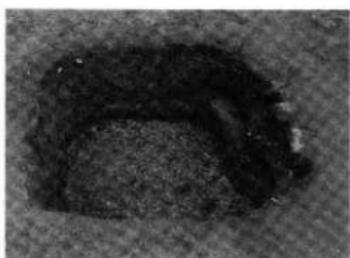


SA2
検出状況
(南から)

わずかに住居の
埋土が残る



S A 1 埋土下部断面および磨製石鐵出土状況



S A 1



S A 4 遺物出土状況



S A 4



S A 6 検出状況



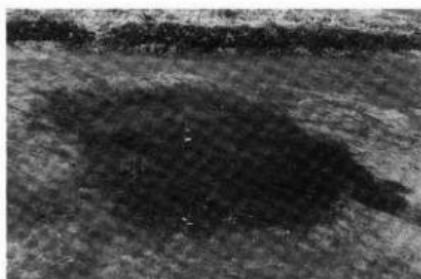
S E 2

図版8

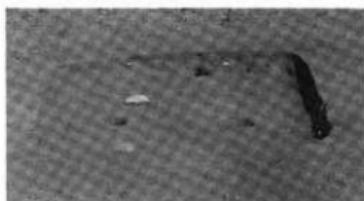


← B区 遺構検出状況（西より）

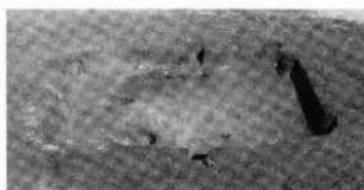
手前よりSA 7・SC16・SC17、SC 6、SC 8
中央奥にSA12のわずかに残る埋土が見える



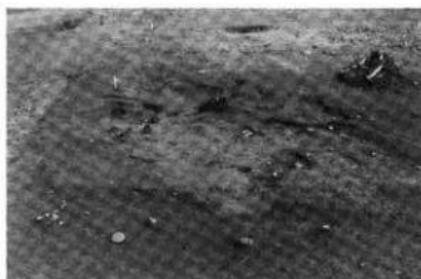
S A 8 検出状況



S A 9



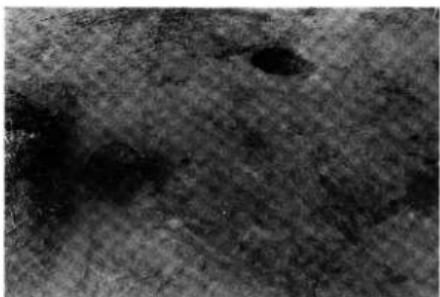
S A 11



S A 10



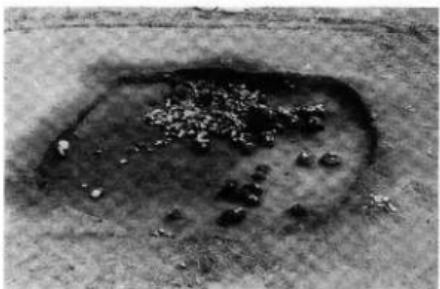
S A 10 北西ピット内土器出土状況



S A12 推定範囲西部 (手前が S C10 右奥が S C 1)



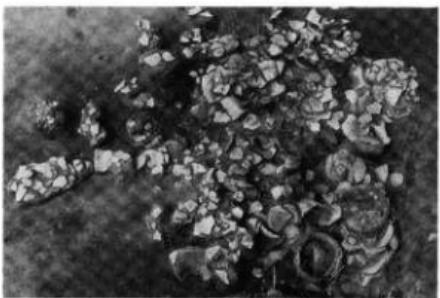
S C 1 検出状況



S A13 遺物検出 (中途) 状況



S C 10 遺物検出状況

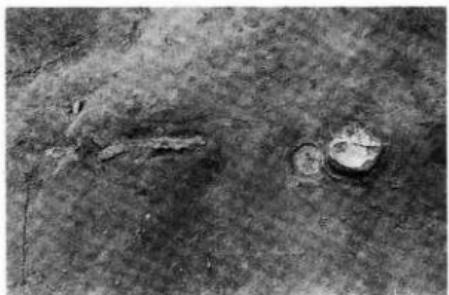


S A13 土器出土状況



S C 11 土器出土状況

図版10



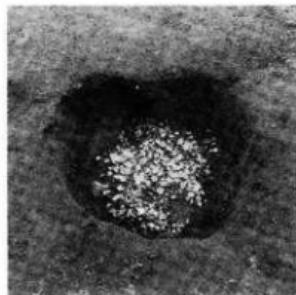
SD 1 遺物出土状況



SC 9 土器出土状況



配石遺構 掘出状況



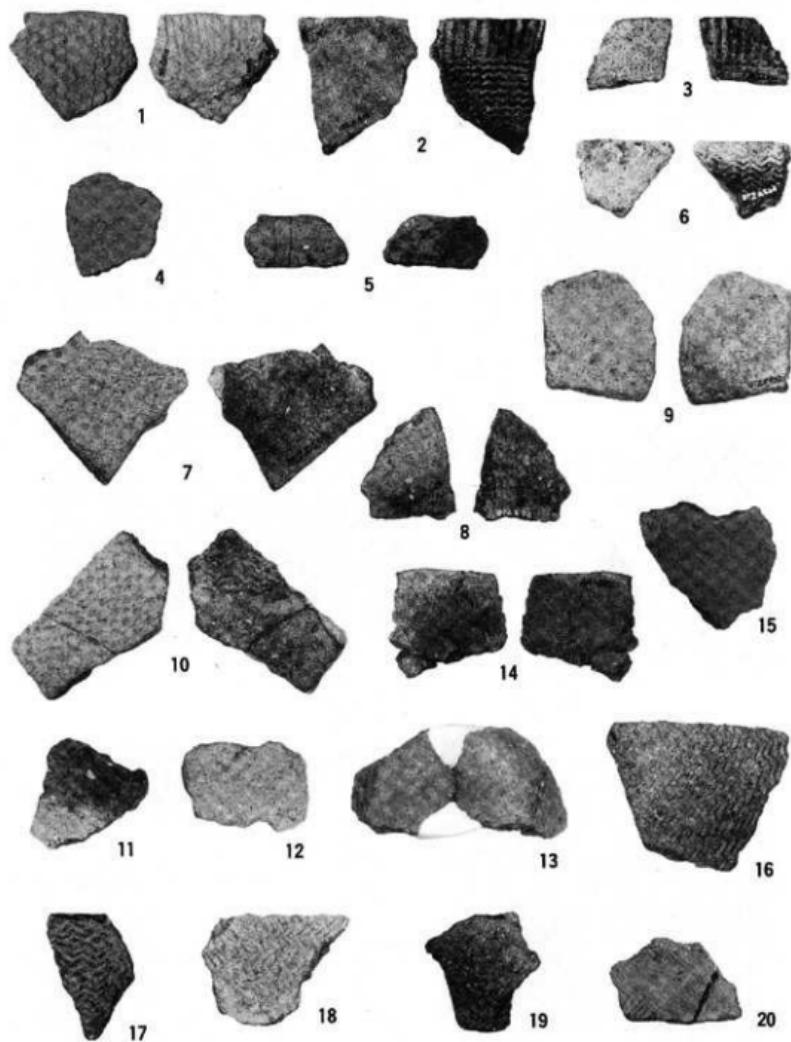
SC 3 貝類出土状況



配石遺構 配石検出状況



SC 19 炭検出状況



縄文土器 1

図版12



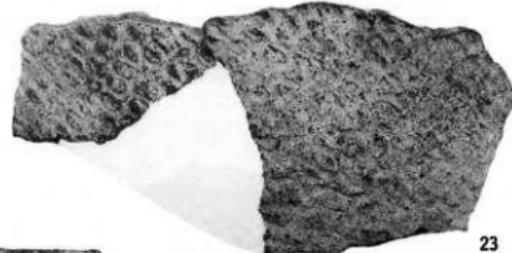
24



22



21



23



25



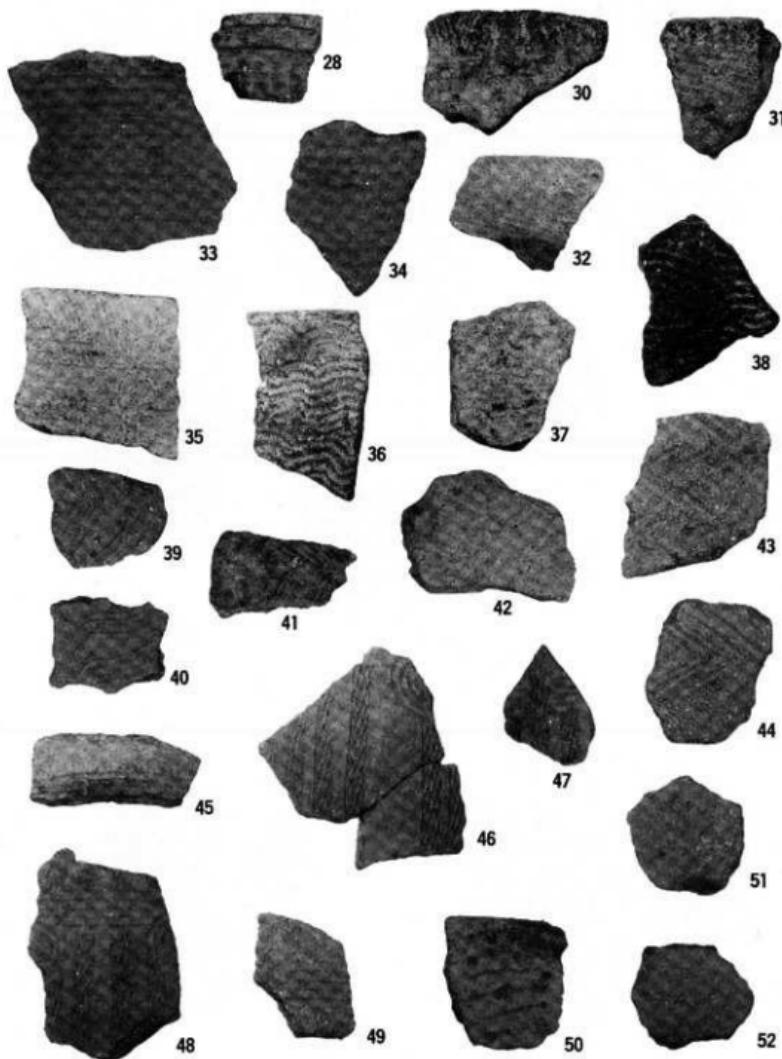
26



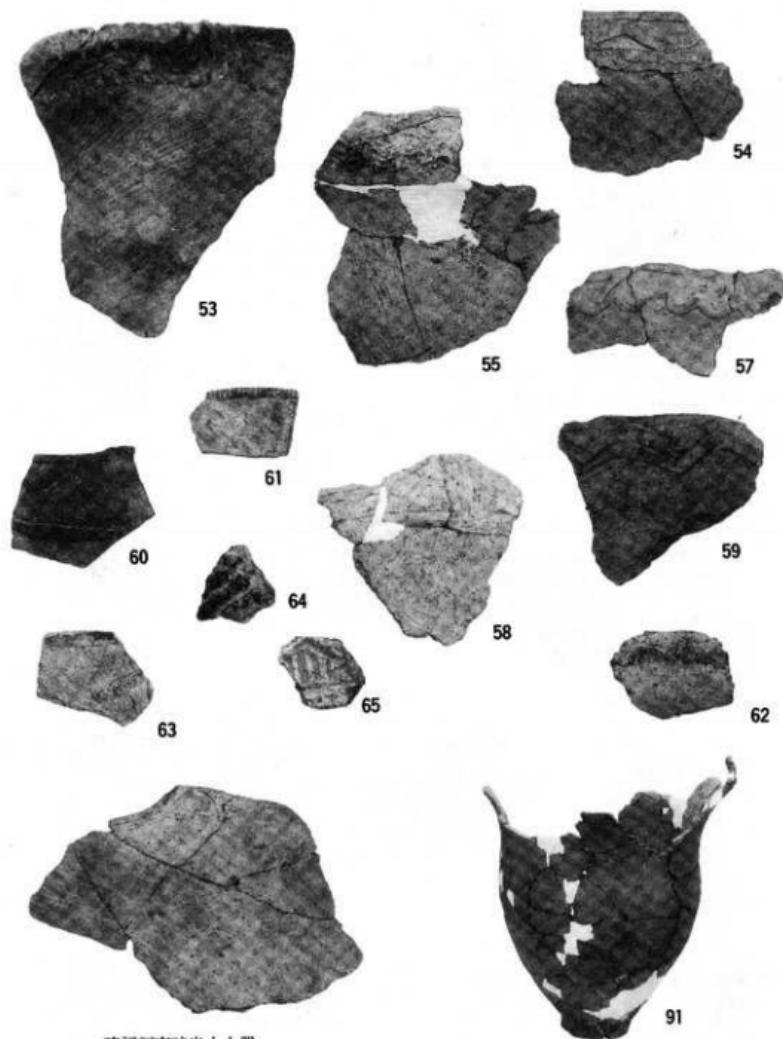
↑
胎土に軽石粒を含む土器
器面や断面に淡黄色の軽石粒が観察される。

← 胎土中の繊維の痕跡が観察される土器片
繊維の量が多すぎたためか内側の器面が
一部剥がれています。

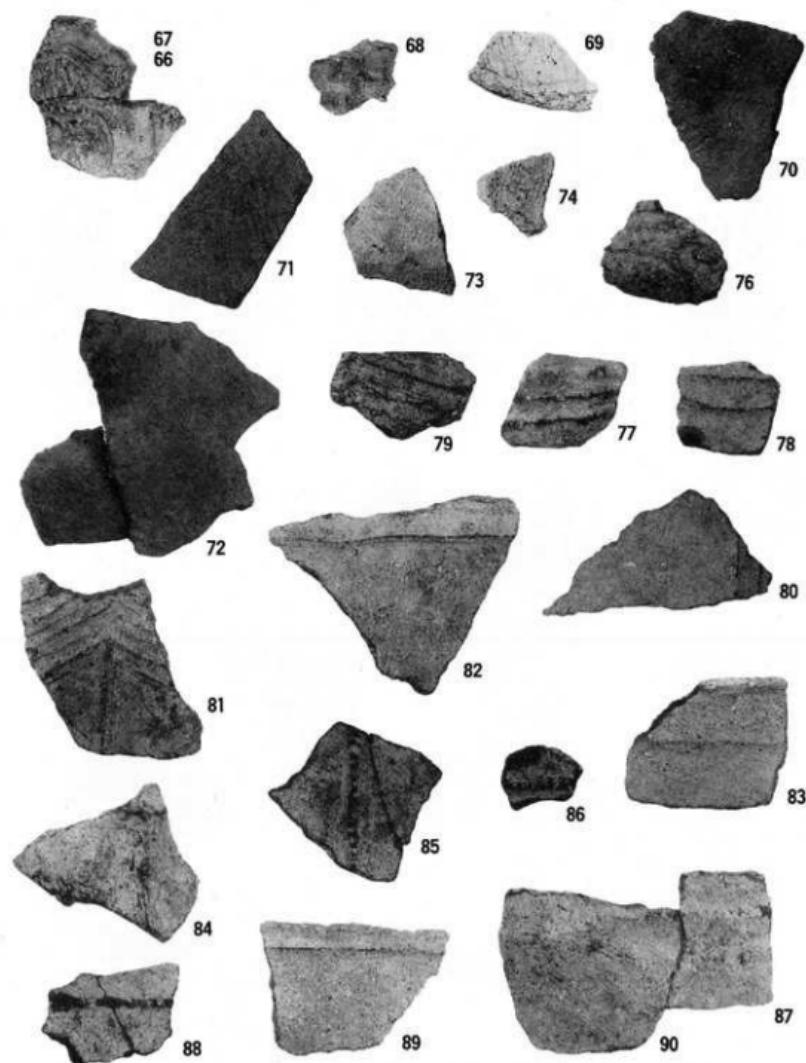
縄文土器 2



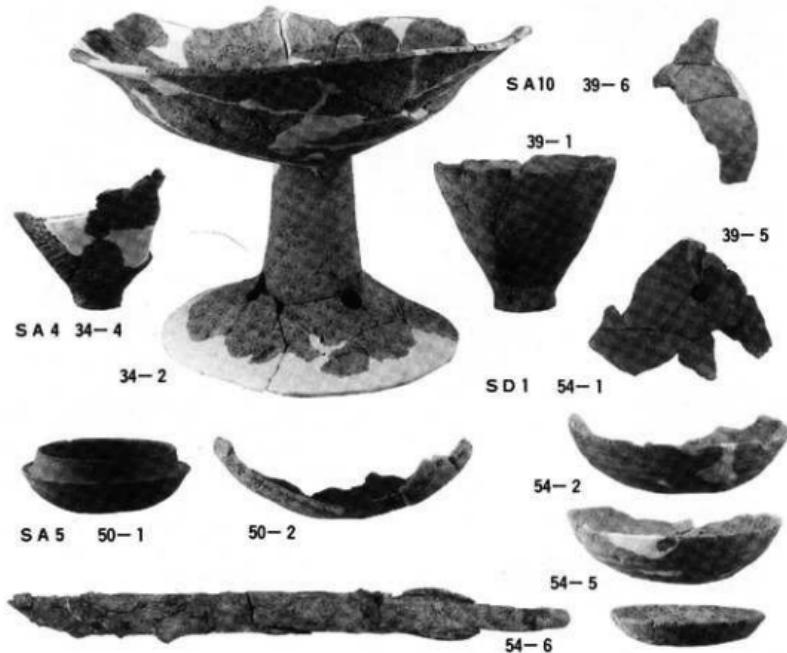
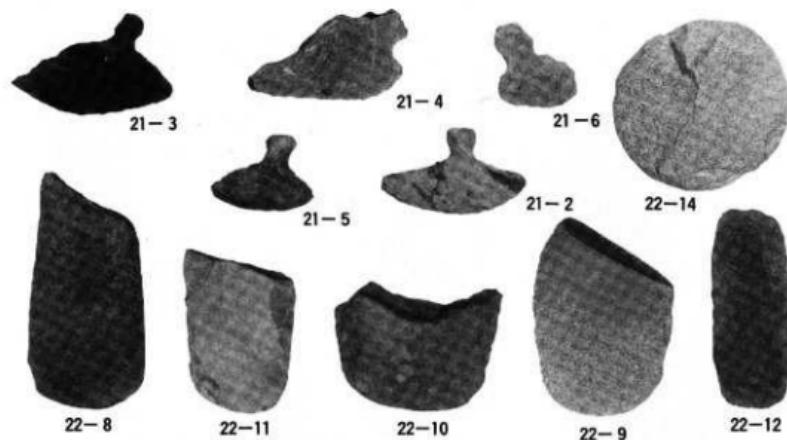
図版14



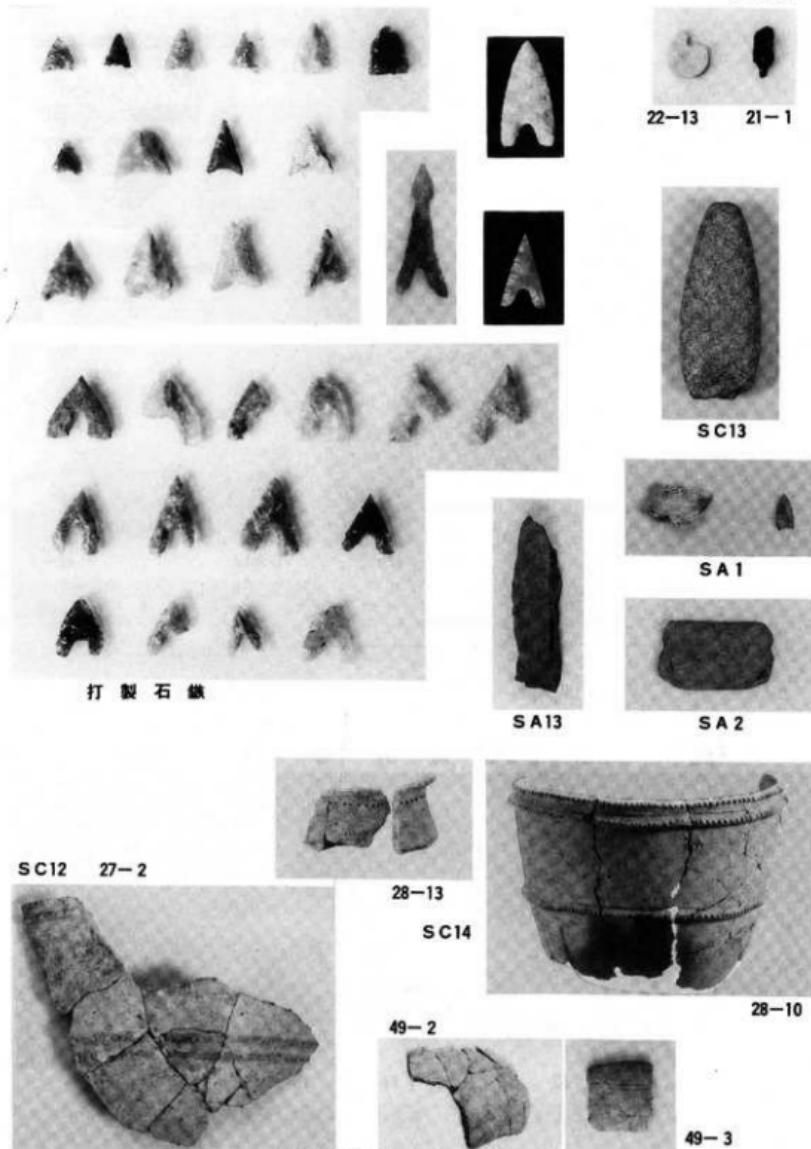
確認調査時出土土器



図版16

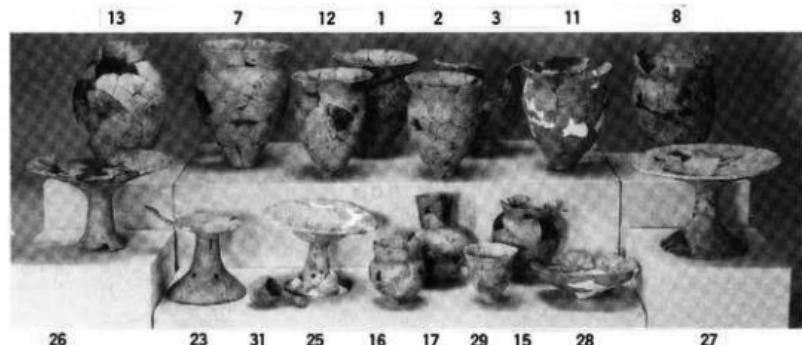
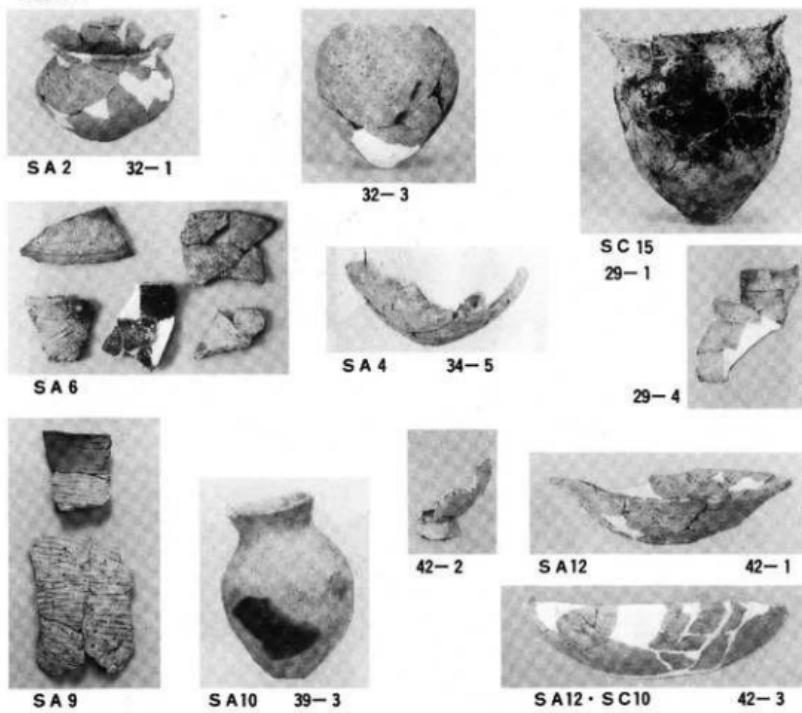


縄文時代の石器、弥生土器、須恵器、土師器、鉄刀（番号は挿図番号—遺物番号）



縄文・弥生時代の石器、弥生土器

図版18



SA 13 出土土器 番号は第45~48図に対応

弥生土器

高鍋町文化財調査報告書 第5集

大戸ノ口第2遺跡

1991年3月

編集・発行 宮崎県児湯郡高鍋町教育委員会

印 刷 (有)印刷センタークロダ
宮崎市大橋2丁目175番地
〒880 電話24-4351番

